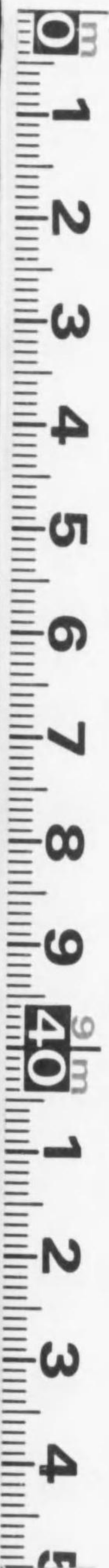


特264

720

十聖週問典禮

始



特264

220



十
聖
週
間
典
禮



Imprimatur

Sapporo, d. 25. Jan. 1930.

+ Wenceslaus Kinold

Vic. Apost.

此の慘狀に立會ひて事の次第を見たる
群衆も皆己が胸を打ちつゝ歸りたり。

(ルカ聖福音書二十三章四十八節)

序に代へて

本書には聖會が聖職者をして行はしむる聖週間の典禮全部—聖務日課を除き—を載せたり。

本書に依り聖週間の典禮に參る時は、聖母及び御弟子等と共に己も又吾主の御苦難の凡ての場面に身を置き、或は主と共にイエルザレムに凱旋し、或は主と共に聖晚餐の廣間に卓を圍み、或は主と共にゲツセマニの園に御死苦を頷ち、或は接吻を以つて敵に賣られ、アンナ、カイファ、ピラトの裁判に曳かれ、死刑の宣告を受け、鞭たれ、茨の冠を被せられ、十字架を擔ひてカルワリオ山上に到り、二人の盜賊の間に磔けられ、死して葬らるゝまでに及ぶなり。

然し斯く典禮において吾主と共に悲しみの道を歩む中にも、吾主の御苦難は聽て我等人類の救靈の玄義の成就にして同時に主の御復活に光榮あらしめ給ふものなるを以

つて、恰も暗雲の中より射込む日光を仰ぐが如く、受難節の最後の悲哀の絶頂にも既に吾主の御復活祭の歡喜の微光の現はるゝを感ずるなり。聖土曜日（聖土曜日）の典禮に御復活の歡喜の稍々に溢るは其故にして、本書に「吾主御復活の大祝日」の典禮をも加へたるも又其爲なり。

尙ほ本書に「通常ミサ順序」を附したるは、典禮中司祭の誦ふるものミ全く同一なるを以つて、之を誦ふる時は能く司祭ミ一致せんが爲なり。

元來此の聖週間の典禮原文は古き羅典語にして、之ミ語脈の類似せる歐語譯も困難となすものなれば、况て之が邦語譯は極めて難事に屬す。随つて邦語譯ミして最初の試みなる本書が不充分なるは勿論なれども、出來得丈け原文に戻らざる様意を用ひたる結果、拮据（拮据）難に陥入れし點多々生ぜしは甚だ遺憾とするところなり。

若し不備なる本書に依りて、聖週間典禮を解され、一層豊なる聖寵を蒙むるの便もなれば、編者の苦心は酬いられて余あるなり。

書中ミサ典禮の一部分、特に舊約聖書の部分に就ては、既刊のものも参考とせり。終に花み、本書の翻譯校正等出版迄で熱誠に御盡力を賜はりし數人の協力者に對して厚く感謝を表す。

附記 本書の典禮ミサ用語の悉しき解説はラゲ師著「聖体の犠牲」（光明社）を参照願ひたし。

昭和五年 聖マリア御告の大祝日に

編者識

聖週間

(十五世紀頃のドイツ民謡)

(一)

イエズスがおん母と別れる時、
最も聖い週間が始まる時、

マリアは非常にお苦しみでありました。
彼女は悲しんで、御子におたづねになりました。

(二)

あゝ我子よ、愛するイエズスよ、
あなたは聖日曜日には、ごうなるでせう。
『日曜日には、わたくしは王と稱へられませう、

人々は私の道に衣服や棕櫚の葉を敷くであります』

(三)

あゝ我子よ愛するイエズスよ、
聖月曜日にはあなたはごうなるでせう。
『月曜日にはわたしは住むに家のない、
哀れなさすらひ人となるであります』

(四)

あゝ我子よ愛するイエズスよ、
聖火曜日にはあなたはごうなるでせう、
『火曜日には私は豫言者ごなりませう、
そして天地の亡びる事を豫言しませう。』

(五)

あゝ我子よ愛するイエズスよ、

聖水曜日には、あなたはごうなるのでせう。

『水曜日には、私は哀れな賤しい者ごなり

銀三十枚で賣られるでありますう』

(六)

あゝ我子よ愛するイエズスよ、

聖木曜日には、あなたはごうなるでせう、

『木曜日には、わたしは食堂の中に居りませう、

そして晚餐の犠牲の小ひつじとなりませう』

(七)

あゝ我子よ愛するイエズスよ、

聖金曜日に、あなたはごうなるでせう、

『あゝ我が母よ、あゝわが愛する母よ、

この金曜日の出来ごきを、お見せしない様に出来たなら』

(八)

あゝ我子よ、イエズスよ、

聖土曜日には、あなたはごうなるでせう、

『土曜日にはわたしは麥の一粒となつて、

地の中に再びうまれてくる爲めに、埋葬されませう』

(九)

『そして日曜日には、あゝ母よ、お喜び下さい。

その日に、わたしは死から蘇生るでありますう、

その時わたしは十字架を旗じるしとしませう、

その時あなたは輝けるわたしを御覧になるでありますう』

(京谷氏譯『聖母頌歌』から)

聖週間典禮目次

一、ミサ聖祭通常順序	1
一、枝の主日	34
一、聖木曜日	73
一、聖金曜日	88
一、聖土曜日	124
一、吾主御復活の大祝日	199
附録	
一、聖油の祝別式	206
一、聖洗足式	220

ミサ聖祭通常順序

(司祭、祭壇の下に立ちて侍者と交替に唱へる)

聖父ミ聖子ミ聖霊の御名に由りて、アーメン

『我天主の祭壇に赴かん』▲『又我が童なるを嘉し給ふ天主に往かん』

(次は詩編 第四章 一一五)

天主、願はくは我を裁きて、情知らぬ民より我が訴訟をあけつらひ、詭詐おほき邪曲の人より我を援出し給へ』▲『天主よ、主こそ我が力の主なり、何とて我を捨て給ひしや、何とて我は仇の暴虐によりて悲しみ憂ひてあるくにや』

『願はくは主の御光明ミ眞ミを放ちて、我を主の聖き山ミ主の庵に導き行かしめ給はんこそを』▲『天主の祭壇に赴き、且我童なる我を嘉し給ふ天主に往かん』

『あゝ天主、我が主よ、我堅琴もて汝を讃めたまへん。あゝ我が魂よ、汝何ぞて頸垂

るゝや、何^{なに}ぞて衷^{うち}に思^{おも}ひ亂^{みだ}るゝや」▲「汝^{なんぢ}、天主^{てんしゆ}に望^{のぞ}みを繋^{つな}げ。我^{われ}尚^{なほ}、我^わが面^{かほ}の援^{たす}けに在^いし給^{たま}ふ、我^わが天主^{てんしゆ}を讚^ほめ稱^たふべければなり」
願^{ねが}はくは聖^{せい}父^ふと聖^{せい}子^こミ聖^{せい}靈^{れい}に榮^{さか}あらん事^{こと}を」▲「始^{はじめ}めに在^ありし如^{ごと}く今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よ々に至^{いた}る迄^{まで}。アーメン」

「天主^{てんしゆ}の祭^{さい}壇^{だん}に赴^{むか}はん」▲「又^{また}童^{わらわ}なる我^{われ}を嘉^よし給^{たま}ふ天主^{てんしゆ}に往^{むか}はん」

(司^し祭^{さい}十字^{じゆう}架^かを記^ししながら)

「我^{われ}等^らの援^{たす}けは主^{しゆ}の御^ご聖^{せい}名^なに在^あり」▲「彼^{かれ}は天^{てん}地^ちを造^{つく}り給^{たま}へり」

(司^し祭^{さい}、屈^かみながら告^こ白^{はく}の祈^{いの}りを唱^{とな}ふ)

(但^{たゞ}し、死^し者^{しや}ミサと受^じ難^{なん}の主^{しゆ}日^{じつ}より聖^{せい}土^ど曜^{やう}日^{にち}のミサ迄^{まで}、以^い上^{じやう}の詩^し篇^{へん}も榮^{さか}しも唱^{とな}へず)

「全^{ぜん}能^{のう}の天主^{てんしゆ}、終^{しゆう}生^{せい}童^{どう}貞^{じゆう}なる聖^{せい}マリア、大^{だい}天^{てん}使^し聖^{せい}ミカエル、洗^{せん}者^{しや}聖^{せい}ヨハネ、使^し徒^と聖^{せい}ペトロ、聖^{せい}パウロ、諸^{しよ}聖^{せい}人^{にん}及^おび汝^{なんぢ}等^ら兄^{あに}弟^{てい}達^{たち}に、我^{われ}の爲^{ため}め主^{しゆ}なる我^{われ}等^らの天主^{てんしゆ}に祈^{いの}られん事^{こと}を願^{ねが}ひ奉^{たて}ま

是^{これ}に因^よりて終^{しゆう}生^{せい}童^{どう}貞^{じゆう}なる聖^{せい}マリア、大^{だい}天^{てん}使^し聖^{せい}ミカエル、洗^{せん}者^{しや}聖^{せい}ヨハネ、使^し徒^と聖^{せい}ペトロ、聖^{せい}パウロ、諸^{しよ}聖^{せい}人^{にん}及^おび汝^{なんぢ}等^ら兄^{あに}弟^{てい}達^{たち}に、我^{われ}の爲^{ため}め主^{しゆ}なる我^{われ}等^らの天主^{てんしゆ}に祈^{いの}られん事^{こと}を願^{ねが}ひ奉^{たて}ま

「アーメン」

▲「全^{ぜん}能^{のう}の天主^{てんしゆ}、終^{しゆう}生^{せい}童^{どう}貞^{じゆう}なる聖^{せい}マリア、大^{だい}天^{てん}使^し聖^{せい}ミカエル、洗^{せん}者^{しや}聖^{せい}ヨハネ、使^し徒^と聖^{せい}ペトロ、聖^{せい}パウロ、諸^{しよ}聖^{せい}人^{にん}及^おび靈^{れい}父^ふに向^{むか}ひて告^こ白^{はく}し奉^{たて}ま

願^{ねが}はくは全^{ぜん}能^{のう}の天主^{てんしゆ}、汝^{なんぢ}等^らの罪^{つみ}を憐^{あは}れみ汝^{なんぢ}等^らの罪^{つみ}を赦^{ゆる}して、終^{しゆう}りなき命^{いのち}へ導^{みち}き給^{たま}へ」
▲「アーメン」

願^{ねが}はくは全^{ぜん}能^{のう}にして慈^じ悲^ひなる主^{しゆ}、我^{われ}等^らの罪^{つみ}を憐^{あは}れみ其^{その}赦^{ゆる}しを與^{あた}へ給^{たま}へ」▲「アーメン」

「天主よ、願みて我等を活さしめ給へ」▲「又主の民は主に於いて喜ばん」
 「主よ御憐みを示し給へ」▲「主の救ひを我等に與へ給へ」
 「主よ我が祈禱を聴き入れ給へ」▲「我が叫びを御前に至らしめ給へ」
 「願はくば主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

(司祭祭壇に登りながら)

祈願せん

主よ、我等至聖なる聖祭に潔き心以て與かるをえんため、願はくは我等より罪惡を取り除かせ給はんことを、我等の主イエズス・キリストに由りて、アーメン。
 (司祭祭壇に接吻しながら)
 主、願はくはここに奉置せる遺物の聖人の功德によりて、我が罪を悉く赦し給はんことを、アーメン。

(盛式ミサの場合には、司祭香を祝しながら)

「汝は主の榮譽の爲め焼き盡されるに由り、主は祝されん事を、アーメン」

入祭文

(右方にて唱ふ、文は當日の祭式に應じて其頁参照)

キリエ

(司祭中央にて)

「主我等を憐み給へ」▲「同」
 「主我等を憐み給へ」▲「キリスト我等を憐み給へ」
 「キリスト我等を憐み給へ」▲「同」
 「主我等を憐み給へ」▲「同」
 「主我等を憐み給へ」▲「同」

榮 誦 (中央にて)

天に於いては天主に榮あれ、地に於いては善意の人に平安あれ、我等主を讚へ、主を
崇め、主を拜禮し主を讚美し奉つる。主の榮の大なるが爲めに謹しんで感謝し奉つ
る。主なる天主、天の王、全能の聖父なる天主、御獨子なる主イエズス・キリスト、天主
なる主、聖父の御子、神の羔、主は世の罪を除き給ふにより、我等を憐れみ給へ。主は
世の罪を除き給ふにより、我等の願ひをきき入れ給へ。主は聖父の右に坐し給ふによ
り、御慈悲の眼を天より垂れ給へ。蓋は主イエズス・キリスト唯一の聖、唯一の主、唯
一の至高者にて在せばなり。主は聖靈と俱に天主なる父、御父の光榮に在し給ふなり
アーメン。

(司祭拜聴者に向ひ)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」
「又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

集 禱 文

(右方にて唱ふ、文は當日の祭式に應じて其の頁参照)

書 簡

(右と同)

(司祭書簡を誦みたる後、侍者答へる)

▲「天主に感謝し奉つる」

昇 階 誦 或は 詠 誦

(右方にて唱ふ、當日の祭式に應じて其の頁参照)

(司祭—盛式ミサの場合補祭—祭壇の中央にて唱へる)

全能の天主、主は豫言者イザヤの唇を熱火もて潔め給ひしに因り、願はくは同じ御慈
悲を以つて我を潔め、主の聖なる福音を告げしめ給はんことを、我等の主イエズス・
キリストに由りて アーメン

(司祭、主の掩視を願ふ)

我が主の福音を正しく且つ善く告げんが爲め、主、我が心と我が唇とに在さん事を、

(盛式ミサの場合には、補祭は司祭の掩視を願ふ)

補「聖父の掩視を冀ふ」

(司祭掩視をなしつゝ)

汝が主の福音を正しく且つ善く告げんが爲め、主、汝の心と汝の唇とに在さん事を、
を、聖父と聖子と聖霊の御名に由りて アーメン。

(司祭左方にて聖福音書を讀む前に)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

(福音史家の名)の聖福音より次の一箇所又は福音の前文)▲「主に光榮あらん事を」

(聖福音後侍者答へる)

▲「キリスト讃へられ給はんことを」

(司祭聖福音に接吻しながら唱へる)

聖福音の聖言に由りて、我等の罪の赦されん事を。

(死人のミサの場合には司祭掩視を除いて接吻する)

信 經

Credo

(司祭祭壇の中央にて)

我は唯一の天主を信ず、即ち全能の父、天地を凡て見ゆる物と見えざる物との創造主
又唯一の主イエズス・キリストを信ず、天主の獨子にて凡ての世紀の前に父より生れ
天主よりの天主、光よりの光、眞の天主よりの眞の天主にて在し、創造られずして生
れ、聖父と一体にして萬物之に依りて創造られ、人たる我等の爲め、又我等の救済の
爲めに天より降り、(跪きながら) 聖霊によりて童貞マリアより人体を享けて人とな
り給ひ、又我等の爲めにボンシヨオ、ピラトの管下にて苦を受け、十字架に釘けられ
て葬られ給ひ、三日目に聖書にありし如く蘇り給ひ、天に昇りて聖父の右に坐し、
而して生ける人と死せる人とを審かん爲めに、光榮を帯びて再び來り給ひ、且つ其の

王國は終り無かるべし。又主にして生命の主なる聖靈を信ず、即ち聖父及び聖子より出で、聖父と聖子と共に拜み尊まれ給ひて、豫言者を以て語り給へり、又一にして聖公、使徒傳來なる教會を信ず。罪の赦されん爲めに一の洗禮を信ず。死したる者の甦るに未來の生命を待ち奉つる。アーメン。

(司祭拜聴者に屈みて唱へる)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

奉獻文

(當日の祭式に應じて其の頁参照)

(司祭俵刻と聖血を上げながら唱へる)

聖なる父、全能永遠の天主、我は卑しき僕なれども、願はくは活ける眞の天主に捧ぐ

る、此汚れなき犠牲を受納れ給へ。今之を我が限りなき罪に、主に對する侮辱と怠慢との爲め、凡てこゝに集まれる人々の爲め、又凡てのキリストの信者、生ける者と死せる者、我と彼との救靈のため永遠の生命に至らん爲めに主に捧げ奉る、アーメン。

(司祭は聖体布を置き、右方にて、祭爵に葡萄酒を入れ之に少しの水を交ぜて後唱ふ)

主よ、主は人性を奇しくも造り給へしかば、更に之を妙なるものに改成め給ひしに由り、今この葡萄酒と水とを合併するによりて、我等をして、人性をうけ給ひし御子我等の主、イエズス・キリストの神性に與らしめ給はん事を。主よ聖靈と共に世々生存へしらしめ給ふ是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる。アーメン

(司祭中央にて之を奉獻しつゝ唱へる)

主よ、主の御慈悲に信賴しつゝ、この救靈の祭爵を主に捧げ奉つる。願はくは天主の偉いなる稜威の聖前にて、我等と又全世界の救靈のため馨ばしき香を放ちて御前に至らん事を、アーメン。

(司祭祭爵を聖体布に置きて、少し俯きて唱へる)

主よ、願はくは深く謙遜り且つ痛悔の心を以て身を捧げ奉つる我等を受け給へ。主なる天主、我等の犠牲をして今日御尊前に於いて全く御心に叶はしめ給へ。

(司祭祭爵と祭爵に十字架を印しながら)

全能永遠にして聖ならしむる天主よ、主の聖名に供へたるこの捧物を祝し給へ。

(盛式ミサの場合は薫香を祝し唱へる)

祭壇の右に立てる大天使聖ミカエル及び凡ての選ばれたる者の傳達によりて、主がこの薫香を祝し、又馨ばしき香を受け入れ給はん事を。我等の主キリストに由りて、

アーメン。

(司祭祭爵と祭爵に薫香しながら)

主よ、祝せられしこの薫香が主に昇らん事を、又我等の上に主の御慈悲の降らん事を。

(十字架と祭壇に撒香しながら) 詩篇 第一四〇章 二一四

主よ、願はくは薫香の如く我が祈りを御前に捧げ、夕の燔祭の如く我が手を舉げて御前に捧げしめ給へ。天主よ、願はくは我が口に守衛を置き、わが唇の扉を衛り給へ。己が罪を辯疏ひて、悪き言葉にわが心を傾かしむること勿らしめ給へ。

(司祭薫香を侍祭に返す時)

主が我等の心にその愛を、火を、永遠の熱心の焔を燃えしめ給はんことを、アーメン

(司祭右にて手を洗ひて唱へる) (詩篇 第廿五章六一十二)

天主よ、我は無罪き人々の中にて手を洗ひ、斯くて汝の祭壇をめぐらん、

感謝の聲を聞えしめ、凡て汝の奇しき御業を宣べ傳へん、

天主よ、我汝の在す家と、汝が榮光の住まる處とを愛しめり、

願はくは我が魂を罪人と共に、我が命を血を流す者と共に亡ほし給ふこと勿れ、

かゝる人の手には悪しき企てあり、その右の手は賄賂にて充つるなり、

されど我は汚れなくして歩めり、願はくは我を贖ひ、我を憐み給へ、

我が足は正しき道に固く立てり、されば我集會の中にて主を讃めまつらん、
願はくは聖父ミ聖子と聖靈に榮光あらん事を、始にありし如く今もいつも世々に至る迄、アーメン。

(死者のミサと受難節のミサの場合には榮誦を唱へず)

(司祭祭壇の中央にて俯きて唱へる)

聖なる三位一体、我等の主イエズス・キリストの御受難、御復活及び御昇天の紀念として行ひ奉つる、我等の献物を嘉納れ給へ。又終生童貞なる聖マリア、及び洗者聖ヨハネ、使徒聖ペトロ、聖パウロ、並に今日祝ふ聖人及び諸聖人の光榮の爲め、且我等の救靈の爲めに、之を捧げ奉つる。願はくは地上に於いて我等の祝ふ聖人が、天に於て我等の爲めに傳達し給はんことを。我等の主イエズス・キリストに依りて、アーメン。

(司祭拜聴者に向ひて)

「兄弟等よ、我ミ汝等ミの献物が全能の聖父なる天主に協ふ様に祈り奉つれ」

▲「願はくは主は献物を汝の手より受納れ給ひて、聖名の讚美と光榮に歸せしめ、我等にも全教會にも益するものならしめ給はん事を」

(司祭小聲にて「アーメン」を云ふ)

密誦 (當日の祭式に應じて其頁参照)

序誦

一、十字架の序誦

(御受難の主日より聖木曜日まで、又主の御受難と聖十字架と聖き御血との祝日に唱へる)

「世々に至る迄」▲「アーメン」
「願はくは主汝等と共に在さん事を」 ▲「又汝の精神と共に在さん事を」
「心を舉げて主を仰ぐべし」▲「我等の心主を仰ぎ奉つる」

「我等主なる我等の天主に感謝し奉つらん」 △「蓋は善く且つ正しき事なる哉」
 實に、善く且正しく益ありて又福なることなる哉。何時にても何處にても主に感謝し奉つるは。聖なる主、全能の聖父、永遠の天主、主は人類の死の原因となりしものによりて彼等が生命に甦る爲め、又樹にて捷利たる悪魔が、同じ樹にて敗れんが爲めに、人類の救済を十字架の樹の上に置き給へり。我等の主キリストによりて、天使は主の偉大なるを讚美し、主權は拜禮し、能力は震へるなり。願はくは主よ、彼等に我等の聲をも交へしめ給へ、されば我等は謙遜しき讚美を以て謳はん。
 聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍の天主なる主、主の光榮は天地に充滿り、いと高き處迄ホザンナ、主の名によりて來れる者は祝せられさせ給へ、いと高き處までホザンナ。

一、御復活節の序誦

「世々に至る迄」 ▲「アーメン」
 「願はくは主汝等と共に在さん事を」 ▲「又汝の精神と共に在さん事を」
 「心を擧げて主を仰ぐべし」 ▲「我等の心主を仰ぎ奉つる」
 「我等の主なる我等の天主に感謝し奉つる」 ▲「善く且つ正しき事なる哉」
 實に、善く且つ正しく益ありて、又福なる哉。我等の過越なるキリストが屠られ給へるによりて主を何時にても、「就中て此の日に」(御復活 大祝 日より復活祭後の土曜日まで)「就中て此の夜に」(聖土曜日)「就中て此の節に」(復活節中の其他の日に)「いと高く讚美すべき哉、彼は世の罪を贖へる眞の羔なり。彼は死をもて我等の死を滅し甦りをもて我等の生命を恢復せしめ給へり、故に天使と大天使、玉座ご主權、又天の凡ての群集と共に、主の御榮の讚美を唱へ、終りなく讚へん。
 聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍の天主なる主、主の光榮は天地に充滿り、いと高き處までホザンナ、主の名によりて來れる者は祝せられさせ給へ、いと高き處までホザンナ。

ミサ典文

Canon Missae

(司祭天を仰ぎつつ、手を挙げ、又俯きながら唱へる)

いと慈悲なる聖父よ、我等の主イエズス・キリストに依りて我等平伏して祈り且つ冀ひ奉つる。願はくはこの献供物、この聖なる汚れなき犠牲を受け且つ祝し給はん事を。

此等の供物をば御前に、殊に主の聖公會の爲めに捧げ奉つる。願はくは全地において之に平安と一致を得せしめ、且つ主の僕なる我等の教皇(御名を加ふ)我等の司教(御名を加ふ)及び公教と使徒傳來の信仰を奉ずる總ての信者と共に治め且つ保たせ給はん事を。

(生ける者の記憶)

主よ、主の僕、婢(名を加ふ)を記憶し、又此處に集れる凡ての人をも記憶し給へ。

蓋は主は彼等の信仰を知り給へばなり。故に我等は彼等の爲めに主に之の聖祭を捧げこの讚美の聖祭を、彼等と彼等に關係ある人々の靈魂の贖と安息の希望の爲めに捧げ奉つる。又人々の爲め、又永遠の活ける眞の神に祈願を捧ぐる人々の爲めにもこの供物を捧げ奉つる。

聖人の通功によりて且つつゝしみて記念す。殊に我等の天主にして主なるイエズス・キリストの聖母、終生童貞にして榮譽なる聖マリア、又同じく主の聖なる使徒と殉教者、聖ペトロ、パウロ、アンドレア、ヤコボ、ヨハネ、トマ、ヤコボ、フェリツボ、バルトロメオ、マテオ、シモン及びダデオ、又聖リノ、クレト、クレメンヌ、クシスト、コルネリオ、チブリアノ、ラウレンチオ、クリソゴノ、ヨハネとパウロ、コスマミダミアノ及び主の凡ての聖人を記念す。願はくは彼等の功德を傳達によりて、凡てに於きて、主の御保護の助力を我等にうけしめ給はん事を、我等の主キリストに依りて、アーメン。

(司祭、捧物に掩手しながら)

されば主よ、願はくは僕たる我等も又主の全家族の捧物を親しく受け納れ給へ。蓋は日々我等を主の平安の中に生るを得せしめ、且我等を終りなき滅より救ひ、主の選びたまへる者の群に加へられんが爲めなればなり。我等の主キリストに依りて。

アーメン。

天主よ、願はくはこの捧物を凡てに於いて祝し、認め、且つ主に適しきものとして嘉納し給はん事を。蓋は、是等は主の最愛なる御獨子、我等の主イエズス・キリストの御肉と御血とに成り給ふべければなり。

主は其御苦難の前日に於いて、その聖なる尊むべき御手にて麴を執り、御眼を天に在す、天主なる主の永遠の聖父に擧げ、主に感謝し、祝して、劈き、之を弟子等に與へて曰はく、**皆之を受け且つ食せよ、これ我が身体なり**

又同じく晚餐終りてこの光榮ある祭爵を、その聖なる、尊むべき御手にて執り、同じ

く主に感謝して祝し、之を弟子達に與へて曰はく、**皆之を受け且つ飲めよ、之れ新しき且永遠の新約の我が血の祭爵なり**。信仰の女義、罪を赦さんごて汝等も衆人の爲に流さるる我が血なり。汝等之等を行ふ毎に、我が記念として之を行ふべし。

聖變化式後

されば主よ、主の僕なる我等も、又主の聖なる民も、御獨子、我等の主キリストの聖き御受難も、死者よりの御復活、又光榮ある御昇天をも共に記憶しつゝ、主の榮譽ある稜威に對して主の降し給ひし賜物により、潔く、聖く、汚れなき捧物として、永遠の生命の尊き麴と限りなき救靈の聖血を捧け奉つる。

願はくは之等の物を慈悲深く、温和なる聖眼以て顧み給へ。主の僕なる義人アベルの供物も、我等の大祖なるアブラハムの供物も、主の司祭長なるメルキセデクが主に捧け奉つりし物を受け納れ給ひし如く、この聖き汚れなき犠牲を受け入れ給はん事を。

(司祭、俯きて唱へる)

願はくは全能の天主、これ等の物を主の聖なる天使の手を以つて、主の最も聖き祭壇
ご至聖なる稜威の御前に運ばしめ給へ。且つこの祭壇より聖子の至聖なる御身と御血
を拜領し奉つる我等をして、凡ての天の祝福と聖寵とに充たさしめ給はん事を、我等
の主キリストに依りて、アーメン。

死せる者の記憶

願はくは主よ、信仰の記號を以つて、先に逝りし者、又平安に眠れる主の僕、婢を記
憶し給へ。(其名を想ひ起す)

天主よ、彼等と又總ての永眠れる者に、キリストに於ける光明と平和と清涼に充てる
所をば與へ給はん事を、我等の主キリストによりて願ひ奉つる、アーメン。

(司祭胸を打ちながら、少し聲を上げて唱へる)

願はくは我等罪人なれども、主の僕なるが故に、主の豊なる慈悲に希望し奉つる。我

等をも、主の聖なる使徒と殉教者の群に結ばるゝ事を得せしめ給へ。即ちヨハネ、ス
テファノ、マチア、バルナバ、イグナチオ、アレキサンデロ、マルセリノ、ペトロ、フ
エリチタス、ベルベツア、アガタ、ルチア、アグネス、セシリア、アナスタシア及び
その他の諸聖人と共に、願はくは我等の値なき功を量り給はずして、却つて御慈悲
を施し給ふ主にて在すにより、我等を彼等の集りに加へ入れしめ給へ。我等の主キリ
ストに由りて。

主よ、主は彼に由りて、いつにてもこの善き物を作り、聖にし、活し、祝し、且つ與
へ給ふ。全能の聖父なる天主よ、彼に由りて、彼と共に、又彼に於いて、聖靈と共に
凡ての榮光と讚美を主に歸すべし。『世々に至る迄』 ▲「アーメン」

祈願せん

我等に益ある命令に奨められ、且つ天主の制定に教へられて敢て主に祈り奉つる。

『天に在す我等の父よ、願はくは聖名の尊まれん事を、御國の來らん事を、聖旨の天に行はるる如く地にも行はれん事を、我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等が人に赦す如く我等の罪を赦し給へ、我等を試みに誘き給はざれ』 ▲『我等を惡より救ひ給へ』 『アーメン』

主願はくは總ての過去現在未來の惡より救ひ給へ。永福にて終生童貞なる天主の聖母マリア、使徒聖ペトロ、聖パウロ及び聖アンドレア及び諸聖人の傳達によりて、豊かな御憐みの助力によりて、何日にも總ての罪より救ひ、安全なる地帯に入れしめん爲め、今も慈悲を以て我等に平和を與へ給はん事を。願はくは主と聖靈と共に統治めし給ふ、是の御子イエズス・キリストに由りて

『世々に至る迄』 ▲『アーメン』
『願はくは主の平安いつにても汝等と共に在さん事を』 ▲『又汝の精神と共に在さん事を』

(司祭は、供麩の一部分を祭爵に入れながら唱へる)
我が主イエズス・キリストの御身体と御血の混和と聖別とは之を拜領せんとする我等に永遠の生命の糧ならん事を、アーメン。

神羔誦

(司祭三回胸をたつきながら唱へる)

『世の罪を除き給ふ神の羔』我等をあわれみ給へ
『世の罪を除き給ふ神の羔』我等をあわれみ給へ
『世の罪を除き給ふ神の羔』我等に平安を與へ給へ (死人ミサの場合に『我等をあわれみ給へ』の代り、『彼等に安息を與へ給へ』三回目には、『彼等に永遠の安息を與へ給へ』) ミ唱ふ

(司祭、俯きて唱へる)

主イエズス・キリスト、主が使徒等に、我は平安を汝等に遣し、我が平安を汝等に與ふ、ミ曰ひしにより、願はくは我が罪をかへりみずして、主の聖會の信仰をかへり

み給ひ、此れ聖旨によりて大平ご一致ごを得せしめ給はん事を、永遠に活き且つ統治し給ふ主よ、アーメン。

(盛式ミサの場合に、補祭平安の接吻をして云ふ)

『汝平安なれ』 ▲又汝の精神と共に在さん事を』

(死者のミサの場合にて平安の接吻と其の前の祈りを省く)

主イエズス・キリスト、活ける天主の御子は聖父の聖旨に従ひて聖霊によりて？ 御死去を以て世に生命を與へ給ひしに由り、願はくはこの至聖なる御身体と御血とによりて總ての罪と萬の悪より我を救ひ、何時にても主の御誠めに従はしめ給ひ、又我を主より離るゝ事を赦し給はざれ、聖父なる天主、聖霊と共に、永遠に活き且つしろしめし給ふ天主よ、アーメン。

主イエズス・キリスト、我、主の御体と御血を拜領するには足らざる者なれご、願はくは此の拜領によりて、我を審判と地獄より免れしめ、かへつて御慈悲を以て靈肉を

守らせ、且つ之を我が聖薬とならしめ給はん事を、聖父なる天主と聖霊と共に、永遠に活き且つ統治し給ふ主よ、アーメン。

(司祭聖体を聖血より取り擧げる時唱へる)

我天上の麴をうけ主の名を呼ばん。

(司祭俯きて、胸を三回打ちながら唱へる)

主よ我は不肖にして主を我が舍下に入るゝに堪へず、唯一言をだに曰はば我が心癒えん(三回) 願はくは我が主イエズスの御身体、我が靈魂を永遠の生命に守り給はん事をアーメン。

(司祭聖体を拜領す)

主よ、我に與へる諸々の恵みは如何にしてか報ゆるを得べき我は救霊の祭爵をうけ主の聖名を呼ばん。我れ主を讃めたゝへ、其の聖名をよびて仇人より救はるゝを得ん。願はくは我が主イエズス・キリストの御血、我が靈魂を永遠の生命に守り給はん事をアーメン

(聖血を拜領す)

(拜聴者、聖体拜領の場合に侍者告白の祈を唱へる)

『全能の天主、終生童貞なる聖マリア、大天使聖ミカエル、洗者聖ヨハネ、使徒聖ペトロ、聖パウロ及び諸聖人、靈父に向ひて告白し奉つる。我は思言と行を以て多くの罪を犯せり、是我が過なり、我が過なり、我がいと大いなる過なり、是によりて終生童貞なる聖マリア、大天使聖ミカエル、洗者聖ヨハネ、使徒聖ペトロ、聖パウロ、諸聖人及び靈父に私の爲め主なる我等の天主に祈られん事を願ひ奉つる』

(司祭は拜領者に向ひて)

『願はくは全能の天主、汝等の罪を赦して終りなき命へ導き給へ』▲「アーメン」

『願はくは全能にして慈悲なる主我等の罪を憐み、その赦しを與へ給へ』▲「アーメン」

(司祭、拜領者に向ひて聖体を顯示しながら唱へる)

『世の罪を除き給ふ、天主の羔羊を見奉つれ。主よ我は不肖にして主を我が舎の下に

入るゝに堪へず唯一言をだに曰はば我が心いえん』

(三回唱へる)

(司祭聖体を授けながら唱へる)

願はくは我が主イエズス・キリストの御身体、汝の靈魂を永遠の生命に守り給はん事を

アーメン。

(司祭、聖体拜領後)

主よ口にて拜領にあづかりし者には、清淨潔白な心を以つて受けしめ給へ。現世にて與へられし賜は我等の永遠の聖業ならしめ給へ。

主よ、拜領奉つりし主の御身体ミ御血ミを我が心に留まらしめ給へ。乞ひ願はくは清く貴き秘蹟にて我を養ひ、罪の汚れをこらざらしめ給へ、永遠に活き、且つ統治し給ふ我、アーメン。

(司祭、祭壇の右方にて)

聖体拜領誦

當日の祭式に應じる頁参照

(司祭、祭壇中央に歸へり、拜聴者に向ひて唱へる)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

(司祭右方に歸りて)

聖体拜領後の文

當日の祭式に應じる頁参照

(司祭、祭壇中央にて)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

「往けよ、ミサ終れり」▲「天主に感謝し奉つる」

(ミサ執行中榮光の讃歌を唱へざる場合はその代りに次を唱ふ)

「主を讚美し奉つれ」▲「主に感謝し奉つる」

(聖土曜日より復活後の土曜日まで)

「往けよ、ミサ終れり、アレルヤ、アレルヤ」

▲「主に感謝し奉つる、アレルヤ、アレルヤ」

(死人ミサの場合にて)

「彼等は安らかに休息まん」▲「アーメン」

(司祭、祭壇中央にて俯きて唱へる)

願はくは聖なる三位一体よ、僕なる我が聖役の主しゆに協はん事を、我足らざれども、主の偉大なる御前まへにて捧げ奉つりし犠牲を受け容れ、又我と、我が捧ぐべき總ての人々のため、主の御憐れみによりて、贖ひて、ならばしめ給はん事を、我等の主キリストに依りて アーメン。

(司祭、拜聴者を掩祝しながら)

「願はくは聖父と聖子と聖霊汝等を祝福せんことを」▲「アーメン」

(司祭左の方に立ちて唱へる)

聖ヨハネ福音書の初め

元始に御言あり、御言神の御許に在り、御言は神にてありたり。是元始に神の御許に在るものにして、萬物之に由りて成れり、成りしもの一つも之に由らずして成りたるはあらず。之がうちに生命ありて、生命又人間の光たりしが光暗に照るも、暗之を曉らざりき。

神より遣はされて、名をヨハネ云へる人ありしが、其來りしは證明の爲にして光を證明し、凡ての人をして己に藉りて信せしめん爲なりき。彼は光に非ずして、光を證明すべき者たりしなり。(御言こそ)此の世に來る凡の人を照らす眞の光なりけれ。曾て世に在り、世又之に由りて成りたれども、世之を知らず、己が方に來りしも、其

族之を承けざりき。然れど之を承けし人々には、各神の子なるべき權能を授けたり。是即ち其名を信する者、血統に由らず、肉の意に由らず、神に由りて生れ奉りたる者なり。

斯て御言は肉と成りて、我等の中に宿り給へり。我等は其光榮を見奉りしが、其は父より來れる獨子の如き光榮なりき。即ち恩寵と眞理とに満ち給ひしなり。
「天主に感謝し奉つる」



枝の主日

解説

枝の主日の祭式は二部より成立す、(一)は枝の祝別式と行列(二)はミサ聖祭

第一部は『我等は聖十字架に於いて死に勝ち給ひし王たるキリストを奉祝す等……』

第二部は『ミサ聖祭に於いて主の受けられし最酷やかなる御苦難を忍ぶ、故にこの主

日の祭式には、歡喜と悲哀を含む、……』

歡喜は、エルザレムに入城し給ふ主の凱旋を歡ぶことであつて、

悲哀は……これと共に、イエズスの受けられんとする御苦難に對するものを追憶する。

枝はエルザレムへ主の入城を奉祝する民の棕櫚の枝を指し、主が死の上に得給ひし勝利、又我等、己が救靈の敵の上に受くべき勝利を意味す。

鮮かなる綠色の枝その物はキリスト信者の善業の生活を指し、又天主に於ける平安と聖寵とを象る。

この枝が聖會の祈りに由りて祝せられたるものなるが故に、信者はこれを大いなる尊敬を以つて保存し、適當の處に置き、之れに依りて聖會の祈禱により主の御助けを待ち望むの意を示す。

枝の祝別式及び行列

(司祭祭壇の右方にて唱へる)

(マテオ聖福音第廿一章の九)

ダヴィドの裔にホザンナ、主の名に依りて来る者は祝せられ給へ、イスラエルの王、最高き處迄ホザンナ、

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

「主よ、主を敬愛し奉つるは義なるが故に、願はくは我等に於て主の妙なる恩寵を増し給はん事を。又聖子の御死去に於て我等に信仰と希望を得せしめ給ひしに依り、願はくは主の御復活に依りて我等をも希望する處へ入れしめ給はん事を。主と聖靈と共に

に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズ・スキリストの聖名に依りて願ひ奉る」

▲「アーメン」

書翰 (出埃及記 第十五章の廿七 第十六章の一七)

「其の時イスラエルの子孫はエリムに到れり。其處に水の井戸十二、棕櫚七十本あり彼處にて彼等水の傍に幕張す、斯くてエリムを出たちてイスラエルの子孫の會衆そのエジプトの地を出しより二箇月の十五日に皆、エリムとシナイの間なるシンの曠野に到りけるが、其の曠野に於てイスラエルの全會衆モイゼとアロンに向ひて咥けり。即ちイスラエルの子孫彼等に云ひけるは、我等エジプトの地に於て肉の鍋の側に坐り飽までにパンを食ひし時に天主の手に依りて死に到らば善かりし者を、何故に汝等は此の曠野に我等を導き出してこの全會を飢死せしめんとするや？ 時に天主モイゼに云ひ給ひけるは、視よ、我パンを汝等の爲に天より降さん、民出でて日用の分を毎日歛むべ

し。斯して我、彼等が吾の法律に従ふや否やを試みん、第六日には彼等その取入れたる物を調理ふべし、其は日に歛むる者の二倍なるべし。モイゼとアロン、イスラエルの全の人々に云ひけるは、夕にいたらば汝等は天主が汝をエジプトの地より導き出し給ひしものなるを知るに到らん、又朝に到らば汝等天主の御光榮を見ん一こ。

昇階誦

(ヨハネ福音書第十一章の五〇―五三)

司祭長フアリサイ人等議會を召集してこの人数多の奇蹟をなすを我等は如何にすべきぞ、もし其の儘に許し置かば皆彼を信仰すべく、又ローマ人來りて我等の土地と國民を滅すべし、と。その中の一人カイファと呼ばるる者その年の大司祭なりけるが、彼等に云ひけるは一人人民の爲めに死して全國民の滅びざるは汝等に利あり、と。さればこの日、彼等イエズスを殺さん謀りしなり。又ローマ人來りて我等の土地國民とを滅すべし、と。

又は他の昇階誦

(マテオ福音書第廿六章の卅九と四十一)

カンラン山に於て聖父に祈り給へり

我聖父よ、もし能ふべくば、此の杯我より去れかし。精神は逸れども肉身は強し、思召の如くになれ、誘悪に入らざる爲めに覺めて祈れ、精神は逸れども肉身は弱し、思召の如くになれ。

聖福音

(マテオ福音書第廿一章の二―九)

其の時イエズスの一行エルザレムに近づきカンラン山の麓なるベトファゲに至りし時イエズス二人の弟子を遣さんとして曰ひけるは、汝等向ひの邑に往け、さらば直になける牡驢馬の其の子と共に居るに遇はん、其を解きて我にひき來れ、若し人ありて汝等に物云はゞ主之を要すと云へ、されば直にゆるすべし、と。總てこの事のなれる

は豫言者によりて云はれし事の成就せん爲めなり、曰く「シオンの女に云へ、看よ汝の王柔和にして牡驢馬と其の子なる小驢馬に乗りて汝等に来る」ミ。弟子達往きてイエズスの命じ給ひし如くになし、牡驢馬と其の子とをひき來り、衣服を其上に敷き、イエズスを是に乗せたるに群衆夥しく己が衣服を道に敷き、或人々は樹の枝を伐りて道に敷きたり。先に立ち後に從へる群衆呼はりて、ダヴィドの子にホザンナ、主の名によりて來れる者は祝せられ給へ、最高き處迄ホザンナ、ミ云ひ居れり。

(司祭右の方にて祈りを唱へながら、枝を祝別す)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

主よ、主を希望する者の信仰を増し給ひ、彼等の切願を慈悲を以て聞き入れ給へ。我等の上に絶えざる主の御哀憐を降し給はん事を。この橄欖の枝と棕櫚の枝を祝別せら

れん事を。主が祝し給ひし聖會の象りなる、箱船より出るノエ、又、イスラエルの子孫と共にエジプトより出るモイゼの如く、棕櫚の枝と橄欖の枝を持ち歩く我等にも善業を以つてキリストを歓迎しめ、彼に依りて永遠の歡喜に入れしめ給はん事を。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉る、アーメン。

序 誦

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

「心を揚げて主を仰ぐべし」▲「我等の心主を仰ぎ奉つる」

「我等、主なる我等の天主に感謝し奉つらん」▲「善く且つ正しき事なる哉」

實に善く正しく且益ありて幸福なる哉！主よ、何日にも何處にても主に感謝を捧ぐる事は。聖なる主よ、全能の父、永遠の天主、主は聖徒の群より榮光を受け給ふ。故

に主よ、總ての被造物は主に仕へ奉る。唯、主を創造主と天主として認め、天地は主を崇め、主の聖徒は主を祝し奉るが故に、總ての被造物は主に仕へ奉る。彼等は主の御一子の偉大なる聖名を全地の王達と世の主権者の前にても、憚りなく讚美し、主の側に、天使と大天使、玉座と主権者は立ちて、萬軍と共に天の群と榮光の讚歌を歌ひ終りなく誦ふなり。

「聖なる哉、聖なる哉、萬軍の天主なる主、主の榮は天地に充滿てり、天の最上なる處にいます者は尊まれさせ給へ、主の名に由りて來れる者は祝せられさせ給へ。」
「願はくは主汝等と共に在さん事を」
▲「又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

聖なる主、全能の父、この棕櫚の枝は主が創りし樹より生ぜしものにして、且曾つて箱船に歸りし鳩の口に持ちしものなりき。願はくはこの棕櫚の枝を祝し聖ならしめ給

はん事を、この枝を受くる者に靈肉共に保護を蒙らしめ、且つ我等の救靈の聖藥、主の聖寵の准祕蹟にならしめ給はん事を ▲「アーメン」

祈願せん

散らせしを集め、集めしを保存し給ふ全能の主よ、棕櫚の葉を以てイエズスを歓迎する人々を祝し給ひし如く、主の僕が、彼の聖名の榮耀の爲め敬虔なる信仰を以て受くべきこの棕櫚の枝、橄欖の枝を祝し、且つ之等が何處に置かるも、其處に住む人々に主の祝福を蒙らしめ給はん事を。しかして主の聖名は總ての不幸を防ぎ、主の御子、我等の主イエズス・キリストに由りて救はれたる者を守り給はん事を、

▲「アーメン」

祈願せん

主は妙なる決定に由りて我等の救靈を無生物をもて象り給ふ思召なるが故に、今日天

の光に照らされたる群集は救世主を歓迎し、主の僕等が棕櫚の枝と橄欖の枝を、主が歩み給ふべき道に敷くの意味を、信徒の敬虔の心に覺らしめ給はん事を。棕櫚の枝は死に對する勝利者の凱旋を示し、橄欖の枝は靈的注油の出現を示すが故に、彼の時に於ける幸なる群衆は、これに依りて主が人類の不幸を憐み給ひて、全世界の生命の爲め、死の長き戦ひ死につゝ凱旋を受け給ひしを覺りて、主に勝利の凱旋、限りなき慈悲の枝を捧げ仕へ奉れり。我等にも完全なる信仰に由りて、其の象徴其の成就を覺らせ給はん事を。聖なる主、全能の父、永遠の天主、我等の主イエズス・キリストに由りて一向乞ひ願ひ奉つる。即ち我等が主の子と召されしも聖慮なるが故に、主に於て、且つ主に因り、我等にも死の上に勝利を得せしめ、我等をして主の榮光なる御復活に肖らしめ給へ、▲『アーメン』

祈願 せん

鳩のもてる棕櫚の枝に依りて地上に平和を告げし給ひし主よ、總ての主の民の救靈ならん爲め、この棕櫚の枝も他の枝をも天上の祝福を以て聖ならしめ給はん事を。我等の主イエズス・キリストに由りて乞ひ願ひ奉る、▲『アーメン』

祈願 せん

主よ、この棕櫚の枝と橄欖の枝を祝し給へ。主の民の主を尊敬しつゝ、今日外形によりて行はんごする事により、悪魔の上に勝利を得、且つ主の御慈悲の聖業を、我等の上に靈的に完うせしめ給はん事を、我等の主、キリストに由りて ▲『アーメン』

(司祭、聖水と香を以つて祝す)

『願はくは主汝等と共に在さん事を』▲『又汝の精神と共に在さん事を』

祈願 せん

主よ、主は御一子、我主イエズス・キリストを卑し給ひ、且つ我等を主に呼び戻さんが爲め、又我等の救靈の爲めにとて此の世に遣し給へり。又豫言者の記録せし處を成就せんが爲めに、信仰せし群集にイエルザレムに上り給ふ主イエズスに、敬虔なる熱誠を以つて己が衣服と棕櫚の枝とを共に道に敷き奉らしめたり。故に我等を御跡にならばしめん爲めが、躓く石と、塞がる岩を取除き給へて、御前に正義の枝を以つて善業を繁らせ、信仰の道に具へしめ給はん事を、主と聖靈と偕に世々生存へしろしめし給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名に由りて願ひ奉つる。▲「アーメン」

交誦

(司祭はこゝで枝を分配す、歌隊は其の時次を歌ふ)

ヘブレオの子等は棕櫚の枝を手に持ち、主を歓迎して呼はりき、「最高き處に在ます者は祝せらせ給へ」と。

又は他の交誦

ヘブレオの子等は衣服を道に敷きて呼はれり、ダヴィドの子にホザンナ、主の聖名に由りて來れる者は祝せらせ給へ。ミ、

(司祭枝を分配して後祈る)

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さん事を」

祈願せん

全能永遠の天主、主は我等の主イエズス・キリストを小驢馬に乗せ給ひ、民の群集には、衣服と木の枝をば道に敷かせ、主イエズスを讚美せしめんが爲め「ホザンナ」を唱へさせ給ひしに由り、願はくは我等をして彼の無垢に倣はしめ、其功に参らしめ給はん事を。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖

名に由りて乞ひ願ひ奉る。▲「アーメン」

行列の聖歌

交誦

(マテオ聖福音書第廿一章の一、二、三、七、八、九)

イエズスの一行エルザレムに近づける時イエズス二人の弟子を遣さんとして曰ひけるは、汝等向ひの邑に往け、然らば直に繋ける牡驢馬と其子と共に居るに遇はん。其を解きて我にひき來れ、若し人ありて汝等に物云はゞ、主之を要すと云へ、ミ。彼等牡驢馬と其子をひき來り、己が衣服を其の上に敷き、イエズスを之に乗せたるに、群集夥しく己が衣服を道に敷き、或人々は樹の枝を伐りて道に敷きたり。先に立ち後に從へる群集呼はりて「ダヴィドの子にホザンナ、主の聖名に由りて來る者は祝せられ給へ。最高き處迄ホザンナ」と云ひ居れり。

又は他の交誦

(ヨハネ聖福音書第十二章の十二、十三)

群集、イエズスのエルザレムに來り給ふ由聞きて棕櫚の枝を執りて出迎へ「ホザンナ主の御名によりて來れるイスラエルの王祝せられ給へかし」と呼はり。彼は民の救靈の爲めに來れり。我等の救靈、イスラエルの救、玉座と主權との出迎へる御者は、如何に偉大なる哉。シオンの女よ。恐れる事勿れ。看よ記録されたる如く、汝の王は小驢馬に乗りて汝に來れり。王よ、世の創造主よ、我等を救はん爲めに來り給ふ御者よ。

他の交誦

過越の祝日の六日前にイエズスのエルザレムに來りし時、群集は彼を出迎へ手に棕櫚の枝を持ちて聲高く呼はれり「最高き處迄ホザンナ」限りなき御慈悲を以て來れる者よ。祝せられ給へ。最高き處迄ホザンナ。

他の交誦

群集は花ミ棕櫚を以つて救主を出迎へ、凱旋すべき勝利者にふさわしき讚美を捧げ奉つる。異邦人も口を以つて天主の御子を宣言なし、キリストを讚美する聲高く天迄もひびき『最高き處までホザンナ』ミ。

他の交誦

等が天使ミへブレオの子等と共に、死の勝利者に『最高き處迄ホザンナ』ミ叫び讚へるを認められん事を。

他の交誦

祝日に集れる夥しき群集は主に叫びて『主の御名によりて來れる者は祝せられ給へ、

最高き處迄ホザンナ

行列聖堂に歸る時二人の前唱者は中に入りて扉をしめ、中にて次を歌ひ、外に居る司祭信者達は、次の折返しを以つて之れに答へる。

中の前唱者

榮光ミ讚美ミ譽榮とは主にあれかし。救主たり王たるキリストよ、爾に、群集は幼子の如くいミ熱誠き心以て敬虔なるホザンナを捧げ奉る』

外の司祭、信者の折返し歌

『榮光と讚美ミ榮譽とは主にあれかし。救主、王たるキリストよ、爾に群集は幼子の如くいミ熱誠き心を以て敬虔なるホザンナを捧げ奉る』

「主はイスラエルの王、名高きダヴィドの子孫にて在す。祝せられ給へたる王よ、王は主の聖名に依りて來りませり。」『折返し』
「高き天なる總ての集ひは、王にて在す主を讚稱ふ。又死すべき人、被造物、いざ皆諸共に」『折返し』

「ヘブレオの群集は棕櫚の枝をば手に持ち主を歓迎へ奉れり、主よ、聖眼を注ぎ給へ。祈願を誓願と讚美を捧ぐる我等に」『折返し』

「彼等は苦しみを受け參らする御主に讚美の貢を捧げ奉れり。主よ、認め給へ、王にて在す主にかく捧ぐる我等の讚歌のひびきを」『折返し』

「彼等の主の聖心に協ひ奉りしごも、我等が熱誠もて歌ふ敬虔なる讚歌も主に協はん事を。善き王よ、限りなき慈悲を具へ給ふ王よ、善き總ての行爲は、王の聖心に如何にふさわしく、協ふ事なる哉。」『折返し』
(扉を開けて、外の人聖堂に入る)

主が聖都に上り給ひし時、ヘブレオの子等は生命の復活を宣言へ、棕櫚の枝を手に持ち叫びぬ『最高き處迄ホザンナ』と、群集はイエズスのエルザレムに來り給ふ由きて、彼を出迎ひ、棕櫚の枝を取りて『最高き處迄ホザンナ』と叫べり。

ミサ典禮

入祭文

(詩篇第廿一章廿、廿二)

主よ聖佑を拒み給はず、擁護の聖手をのばし給へ。獅子の口より我を救ひ、猛き獸の角にむかひて我が孱弱を助け給へ。

(詩) 天主、我が天主よ、我に聖眼を注ぎ給へ。何とて我を棄て給ふや、我より主の愛憐をうばうものは、實に我が罪科のほかはなし。主よ…聖佑云々…(詩「迄繰返す」)

集禱文

全能永遠の天主、主は謙遜の模範を示さんとて、救主として人骸を亨け、十字架の苦をも忍ぶをのぞませ給へり。願はくは其の忍耐を以て我等に主の復活に與るの榮譽を得る道を教へ給はん事を、我等の主イエズス・キリストに依りて願ひ奉る、アーメン

書簡

(フィリッピ書第二章の五、十一)

兄弟等よ汝等志す事は、キリスト・イエズスの如くなれ。即ち彼は神の貌に在して神と並ぶ事を盗とは思ひ給はざりしも、己を無きものとして、奴隸の容を取り、人に似たる者となり、外貌に於て人の如くに見え、自ら謙りて、死、而も十字架上の死に至るまで、従へる者となり給ひしなり。是故に神も亦之を最上に擧げて、賜ふに一切の名に優れる名を以てし給へり。即ちイエズスの御名に對しては、天上のもの、地上のもの、地獄のもの、悉く膝を屈むべく(ここに於て司祭は跪く)又凡ての舌は父にて在す神の光榮の爲に、イエズス・キリ

ストの主に在せる事を公言すべし。

昇階誦

(詩篇第七十二章、廿四、一一三)

主は其聖手に我を執り、聖慮に従ひて我を導き、其榮光の中に受け給ひぬ。イスラエルの天主は正しき心の者にいかばかり慈悲ふかくなりますや、されど我足は微にふるひ我歩はやくに跟きぬ。是れ惡き徒輩の跳梁を見て我心うちに疼めるが故なり。

詠誦

(詩篇第廿一章二、九、十八、十九、廿二、廿四、三十二)

嗚呼、我が天主よ、わが天主よ、聖眼をば我に注ぎ給へ。何とて我を棄て給ふや、我より主の憫を奪ふものは實に我が罪科のほかはなし。我は終日、主の我に耳かたむけたまうまで、斷ず主に向ひて叫ばん。我終夜聲をあけて呼はば主はついに黙し給ふことなからん。

主は其聖所に住み給ふ。主はイスラエルの榮譽なり。我等の祖先は望みを主におけり。彼等はそのぞみなければ主は之を援け給へり。彼等主に向ひて叫びければ、主之を聴きいれ給へり。

彼は主に望をおきしに曾て耻かしめられし事なかりき。凡て我を見し者は我を言れり。彼等は頭をふりうごかしつゝ云へり。『彼は主を頼めり、主若し眞實に彼を愛さば主は彼を援けり』と。彼等は斯る光景に我をながめて樂しめり。彼等はわが衣服を分け、わが下衣を抽籤せり。獅子の口より我を救ひ、猛獸の角にむかひて、我が屏弱を助け給へ。主を畏るゝヤコブの兒女よ、舉りて主を讚へ。光榮を主に歸すべし。これより後、人類は主に屬しまつらん。而して主は正に生るべき民、主の造り給へる民にその正義を宣せ給はん。

マテオ聖福音書に於ける

吾主イエズス・キリストの御苦難

(マテオ聖福音書第廿六章第廿七章全部)

イエズス、總て此の談を畢り給ひて、弟子等に曰ひけるは、十^一汝等の知れる如く、二日の後は過越の祝行はれん。然て人の子は十字架に釘けられん爲めに付さるべし』と。

其の時司祭長、民間の長老等、カイファと云へる司祭長の庭に集り、詭りてイエズスを捕へて殺さん謀りしが、云へらく、祝日には之を爲すべからず、恐らくは騒動人民の中に起らん、と。

然てイエズス、ベタニアにて癩病者シモンの家に居給ひけるに、或女價高き香油を

枝の主日 マテオ聖福音書に於ける吾主イエズス・キリストの御苦難

盛りたる器を持ちてイエズスに近づき、食に就き居給へる頭に注ぎしが、弟子等之を視て憤り、其費は何の爲ぞ、是は高く賣りて貧者に施すを得たりしものを、云ひけるを、イエズス知りて彼等に曰ひけるは「何ぞ此の女を累はすや、彼は我に善業を成せり。蓋貧者は常に汝等と共に居れども、我は常に居らず、此女が此香油を我身に注ぎしは、我を葬らんして爲したるなり。我誠に汝等に告ぐ、全世界何處にもあれ、此の福音の宣傳へられん處には、此の女の爲ししこども、其の記念として語らるべし」云。

時に十二人の一人イスカリオテのユダ云へる者、司祭長等の許に往きて、汝等我に何を與へんとするか、我汝等に彼を付さん、云ひしに、彼等銀三十枚を約せしかばユダ此時よりイエズスを付さんして機を窺ひ居たり。

無酵麴の祝の日、弟子等イエズスに近づきて云ひけるは、我等が汝の爲めに備ふる過越の食事は何處ならん事を望み給ふか。イエズス曰ひけるは、「汝等街に往き、某

の許に至りて、師曰く、我時近づけり、我弟子と共に汝の家に過越を行はんこす云へ」と。弟子等イエズスに命ぜられし如くにして、過越の備を爲せり。夕暮に及びて、イエズス十二弟子と共に食に就き給ひしが、彼等の食しつゝある程に曰ひけるは「我誠に汝等に告ぐ、汝等の中一人我を付さんこす」云。彼等甚だ憂ひて、主よ、其は我なるか、各云出でしに、イエズス答へて曰ひけるは「我と共に鉢に手を附くる者我を付さん。抑人の子は、己に就きて録されたる如く逝くと雖、人の子を付す者は禍なる哉、生れざりしならば、寧彼に取りて、善りしものを」云。イエズスを賣りしユダ答へて、ラビ其は我なるかと、云ひしにイエズス「汝の云へる如し」と曰へり。一同晚餐しつゝあるに、イエズス麴を取り、祝して之を擘き、弟子達に與へて曰ひけるは「汝等取りて食せよ、是我體なり」云。又杯を取りて謝し、彼等に與へて曰ひけるは「汝等皆之を飲め、是罪を赦されんとて衆人の爲めに流さるべき、新約の我血なり。我汝等に告ぐ、我父の國にて汝等と共に新なるものを飲まん日

まで、我今より此の葡萄の液を飲まじ』と。
 斯くて讚美歌を誦へ畢り、皆カンラン山に出行きけるに、イエズス曰ひけるは「十」今夜汝等皆我に就きて躓かん、其は録して（我牧者を撃たん、斯て群の羊散らん）とあればなり。然れど我蘇りて後、汝等に先ちてガリラアに往かん』ペトロ答へて云ひけるは、假令人皆汝に就きて躓くとも、我は何時も躓かじ。イエズス答へて曰ひけるは「十」我誠に汝に告ぐ。今夜鶏鳴く前に、汝三度我を否まん。』ペトロ云ひけるは假令汝と共に死すべくとも、我汝を否まじと。弟子達皆同じ様に云へり。
 斯てイエズス彼等と共にゲツセマニ云へる田家に至り、弟子達に向ひて「十」我が彼處に往きて祈る間、汝等此處に坐せよ』と。曰ひ、ペトロロゼベデオの二人の子を携へて憂悲み出で給へり。然て彼等に曰ひけるは「十」我魂死ぬばかりに憂ふ、汝等此處に留りて我と共に醒めて在れ』と。然て少し進み行き、平伏して祈りつゝ曰ひけるは「十」我父よ、若能ふべくば、此杯我より去れかし、然れど我意の儘にこには非ず思

召の如くになれ』と。斯て弟子達の許に至り、彼等の眠れるを見てペトロに曰ひけるは「十」斯も汝等、一時間を我と共に醒て居る能はざりしか、誘惑に入らざらん爲めに醒めて祈れ、精神は逸れども肉身は弱し』と再び行きて祈り曰ひけるは「十」我父よ、此杯我之を飲ますして去る能はずば、思召成れかし』と。又再び至りて彼等の眠れるを見給へり。蓋彼等の目勞れたるなり。又彼等を離れ行き、三度目に同じ言を唱へて祈り給ひしが、頓て弟子達に至りて曰ひけるは「十」今は早眠りて息め、すは時近づけり、人の子罪人に付されんとす。起きよ、行かん、看よ、我を付す者近づけり』と。尙語り給へるに、折しも十二人の一人なるユダ來り、又司祭長、民間の長老等より遣はされたる大群衆劍と棒を持ちて是に伴へり。イエズスを賣りし者彼等に相圖を與へて、我接吻する所の人其なり、彼を捕へよ。云ひしが、直にイエズスに近づき、ラビ安られ、と云ひて接吻せり。イエズス彼に曰ひけるは「十」友よ、何の爲めに來れるぞ』と。時に人々近づきて、イエズスに手を掛けて之を捕へたり。折しもイエズス

ご共に在し者の一人、手を伸べて剣を抜き、司祭長の僕を撃ちて其耳を斬落し、かば
イエズスは是に曰ひけるは「**十**」汝の剣を鞘に收めよ、其は總て剣を把る者は剣にて亡
ぶべければなり。我、我父に求め得ずと思ふか、父は必ず直に十二隊にも余れる天使
を我に賜ふべし。若し然らば、斯あるべしと云へる聖書の言争か成就せん」と。同
時にイエズス群衆に曰ひけるは「**十**」汝等強盜に向ふ如く、剣と棒を持ちて我を捕へ
に出来りしか、我日々(神)殿にて汝等の中に坐して教へ居りしに、汝等我を捕へざり
き。然れど、總て此の事の成れるは豫言者等の書の成就せん爲なり」と。此の時弟子
等皆イエズスを舍きて遁け去れり。

イエズスを捕へたる人々、既に律法學士、長老等の相集り居たる司祭長カイファの家
に引行しが、ペトロ遙にイエズスに従ひて司祭長の庭まで至り、事態を見んとて内に
入り、僕等と共に坐し居たり。司祭長等と凡ての議員とは、イエズスを死に處せんこ
て、是に對する偽證を求め、許多の偽證人來りたれども猶之を得ざりしが、終に二

人の偽證人來りて、云ひけるは、此人「**我**は神殿を毀ちて三日の後再び之を建直す事
を得」と云へり、と。司祭長起ちてイエズスに向ひ、此の人々の汝に對して證する所
に、汝は何をも答へざるか、と云ひしも、イエズス黙し居給へば、司祭長云ひけるは
我活ける神によりて汝に命ず、汝は神の子キリストなるか我等に告げよ。イエズス
曰ひけるは「**十**」汝の云へるが如し、然れども我汝等に告ぐ、此後汝等、人の子が全能
に在す神の右に坐して、空の雲に乗り來るを見るべし」と。此の時司祭長己が衣服を
裂きて云ひけるは、彼胃瀆の言を出せり、我等何ぞ尙證人を要せん、汝等今胃瀆の言
を聞きて如何に思ふぞ、と。彼等答へて、其の罪死に當る、と云へり。

是に於て下役等イエズスの御顔に唾し、拳にて打ち、或者は平手にて御顔をたききて
云ひけるは、キリストよ、汝を打てる者は誰なるかを我等に豫言せよ、と。
然てペトロ外にて庭に坐し居たるに、一人の下女是に近づき、汝もガリラアのイエズス
と共に居りき、と云ひしかば、彼衆人の前にて之を否み、我汝の云へる所を知らず、と

云へり。門を出る時、又他の下女之を見て、居合す人々に向ひ、是もナザレトのイエズスと共に居りき、云ひたるに、彼又誓ひて、我彼人を知らず、云ひたり。暫くありて側なる人々近づきてベトロに云ひけるは、汝も確に彼等の一人なり、汝の方言までも汝を顯せり、と。是に於て彼、其人を知らず、とて詛ひ且誓ひ始めしかば、忽にして鶏鳴けり。斯てベトロ、イエズスが鶏鳴く前に汝三度我を否まん、云ひし言を思出し、外に出で、甚く泣けり。
黎明に及びて、司祭長民間の長老等、皆イエズスを死に處せんと協議し、縛りて之を召連れ、總督ボンシヨ、ピラトに付せり。
時にイエズスを付し、ユダ、其宣告せられ給ひしを見て後悔し、三十枚の銀貨を司祭長、長老等に齎して之を返し、我無罪の血を賣りて罪を犯せり、と云ひしかば、彼等云ひけるは、我等に於て何かあらん、汝自見るべし、云。ユダ銀貨を(神)殿の内に投棄て、去りしが、往きて繩を以て自縊れたり。

司祭長等、其銀貨を取りて云ひけるは、是血の値なれば賽銭箱に入るべからず、と。即ち協議して、是にて陶匠の畑を買ひ、旅人の墓地に充てたり。故に此畑、今日までもハケルダマ、即ち血と畑と呼ばれたり。是に於て豫言者エレミアによりて云はれし事成就せり、曰く『彼等はイスラエルの子等に評價られしもの、値なる銀貨卅枚を取り、陶匠の畑の爲めに與へたり、主の我に示し給へる如し』云。然てイエズス總督の前に出廷し給ひしに、總督問ひて云ひけるは、汝はユデア人の王なるか、イエズス曰ひけるは『汝の云へる如し』と。斯て司祭長、長老等より訴へられ給へども、何事も答へ給はざりければ、ピラト是に云ひけるは、彼等が汝に對して如何に大なる證言を爲すかを知らざるか、云。イエズス一言も是に答へ給はざりしかば、總督感嘆する云々甚だしかりき。

茲に祭日にあたりて、總督が人民の欲する所の囚人一箇を釋すの例ありしが、折しもバラバミ云へる名高き囚人あるにより、ピラト彼等の集りたるに、汝等は我誰を釋さ

ん事を欲するか、バラバか、キリストか云へるイエズスカ、と云へり。其は人が妬によりてイエズスを付ししを知らばなり。然て總督法廷に坐しけるに、其妻人を遣はして云ひけるは、汝此義人にかゝはる事勿れ、蓋し、我今日夢の中に、彼の爲め多く苦しめり、と。司祭長、長老等、人民に向ひ、バラバに乞ひてイエズスを亡さん事を勧めしが、總督答へて、汝等は二人の中何れを釋されん事を望むか、云ひしに彼等、バラバを云ひしかば、ピラト云ひけるは、然らばキリスト云へるイエズスを我如何に處分せんか。皆曰はく、十字架に釘けよ、と。總督彼何の惡を爲ししか、云ひたれど彼等益々叫びて、十字架に釘けよと、云ひ居たり。ピラト其何の効もなく却て騒動の彌益を見て、水を取り、人民の前に手を洗ひて云ひけるは、此義人の血につきて、我は罪なし、汝等自見るべし、と。人民皆答へて、「其血は我等子等の上にかゝれかし」と云ひしかば、總督バラバを彼にゆるし、イエズスを鞭たせて十字架に釘けん爲彼等に付せり。

然て總督の兵卒等、イエズスを役所に引き取り、全隊を其許に召集め、其衣服をはぎて、赤き袍を着せ、茨の冠を編みて其頭に冠らせ、右の手に葦を持たせ、其前に跪きて、ユデア人の王よ安られ、と云ひて嘲り、又是に唾吐きかけ、葦を取りて其頭を打ち居れり。

イエズスを嘲弄して後、其袍をはぎて原の衣服を着せ、十字架に釘けんとて引所きしが、街に出る時、シモンと名くるシレネ人に遇ひしかば、強て是に十字架を擔はせたり。斯てゴルゴタ即ち髑髏と云へる所に至り、膽を和ぜたる葡萄酒をイエズスに飲ませんせしに、之をなめ給ひて、飲む事を肯じ給はざりき。彼等イエズスを十字架に釘けて後、籤を引きて其衣服を分ちしが、是豫言者に託りて云はれし事の成就せん爲なり。曰く「彼等互ひに我衣服を分ち、我下着を抽びきにせり」也。彼等復坐して、イエズスを守り居りしが、其頭の上に、是ユデア人の王イエズスなり、と書きたる罪標を置けり。

然て是共二人の強盜、一人は其右に、一人は其左に十字架に釘けられしが、往來の人イエズスを罵り、首を振りて、噫汝神殿を毀ちて三日の中に之を建直す者よ、自らを救へ、若神の子ならば十字架より下りよ、云ひ居たり。司祭長等も亦、律法學士、長老等共同じく嘲りて云ひけるは、彼は他人を救ひしに自を救ふ能はず、若イスラエルの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信ぜん。彼は神を頼めり、神若彼を好せば今救ひ給ふべし。其は『我は神の子なり』と云ひたればなり、と。イエズスと共に十字架に釘けられたる強盜等も、同じ様に罵り居たり。斯て十二時より三時迄、地上徧く黑暗となりしが、三時頃、イエズス聲高く呼はりて曰ひけるは「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」云、是即、我神よ、我神よ、何ぞ我を捨て給ひしや、の義なり。其處に立てる者の中或人々之を聞きて、彼エリアを呼ぶよ云ひ居りしが、やがて其中の一人走り行き、海綿を取りて酢を含ませ、葦につけて彼に飲ませんとせるに、他の人措け、エリア來りて彼を救ふや否やを見ん、と云ひ居

たり。イエズス復聲高く呼はりて息絶へ給へり。(跪づき、黙想す) 折しも神殿の幕上より下まで二つに裂け、地震ひ、磐は破れ、墓開け、眠りたる聖人の骸多く起上りしが、イエズスの復活の後、墓を出でて聖なる都に至り、多くの人に現れたり。百夫長及是共イエズスを守る人々、地震起れる事を見て甚だ怖れ、彼は實に神の子なりきと云へり。

然て此處に、ガリレアよりイエズスに従ひて事へつゝありし多くの婦人、立離れて居りしが、マグダレナ・マリアミ、ヤコボ、ヨゼフの母なるマリアと、ゼベデオの子等の母も其の中に在りき。

日暮に及びて、マリマテアの富者ヨゼフ云へる者來り、己もイエズスの弟子なりければ、ピラトに至りてイエズスの屍を乞ひたるに、ピラト之を付す事を命ぜしかば、ヨゼフ屍を取りて淨き布に包み、磐に鑿りたる新しき墳に納め、其墳の入口に大なる石を轉して去れり。マグダレナ・マリアと他のマリアとは其處に在りて、墳に向ひて

坐し居たり。

(次より普通の時の聖福音の如く歌ふ)

翌日即用意日の次の日、司祭長ファリサイ人等、ピラトの許に集ひ至りて云ひけるは君よ、我等思出したり、彼偽者尙存命せし時、我三日の後復活せんと云ひしなり。然れば命じて三日迄墳を守らせよ。恐らくは其の弟子等來りて之を盗み、死より復活せりと人民に云はん、然らば後の惑は前よりも甚しかるべし、ミ。ピラト彼等に向ひ、汝等に番兵あり、往きて思ふまゝに守れと云ひければ、彼等往きて石に封印し、番兵に墳を守らせたり。

信 經

奉 獻 文

(詩篇第六十八章廿一、廿二)

我心はもはや暴虐と苦惱のほかになつものはなし。我望めども空しく、我災厄を憫

むものなし、われ慰藉者をたづね求めたり、されど遂に之を見出さざりき、彼等われに食せきて膽をあたへ、わが渴けるに酢をのましめたり。

密 誦

主よ、わが祈願をきき容れ給へ。願はくは主の稜威に對してさ々けられたる犠牲によりて、我等に敬虔なる念をおこすの恩寵をあたへ、我等をして無疆慶福の日をすすさしめ給はん事を。我等の主イエズス・キリストに依りて願ひ奉つる ▲『アーメン』

序 誦

十字架の序誦

(ミサ順序の廿頁参照)

聖 体 拜 領 の 誦

(マテオ聖福音書第廿六章の四十二)

わが聖父よ、此杯我之を飲まずして去る能はずば、思召成れかし。

聖体拜領後の文

主よ、願はくは此の聖祭の功德によりて、我等の過失を浄め、望む所の正義をば私等に充溢れしめたまはん事を。我等の主キリストによりて、虔て冀ひ奉つる。

▲「アーメン」

(枝の祝別式なく、通常ミサの場合は終りの福音として祝別式中に現れたる聖福音書を読むべし)

聖木曜日

吾主晚餐の木曜

解説

聖會は今日のミサ聖祭において、至聖なる聖体と品級の兩祕蹟の制定を記念す。

但し、聖週間の悲しみ中には、この歡喜の記念を盛大に行う事を控へ、別に聖体の大祝日を定めあるも、或る程度迄當日にも聖体制定の記念の歡喜を表現す。

其故、今日の祭服の色は白を用ひ祭壇の裝飾もミサ終了迄取らず、又ミサ中には榮光の聖歌を除かず、之を歌ひつゝ、鈴と釣鐘を鳴らし、復活祭前の最後となす。之より聖土曜日のミサ聖祭中の榮光の聖歌迄、主がカンラン山に於いて御苦難を始め給ひし象徴として樂器、鳴物等を停止し靜肅を保つ。

聖會のミサ書に於いては今日の祭日を「我が主晚餐の木曜日」ミ名づけ、通常ミサを許さず、一の聖堂においては唯一回のミサ聖祭を執行するを許され、當日ミサを執行せざる司祭は聖祭中聖体を拜領す。

尙ほ當日晩には、不幸なるユダが主に裏切の接吻せるを記憶して、聖會は當日のミサ聖祭中盛式ミサに行はれる平安の接吻を省く。
又當日、司教はその本聖堂に於いて、洗禮、堅振、品級、終油及び獻堂式等に用ふる聖油並に聖香油を聖別す。

(聖油聖列式の典禮文は本書附録に載す)

ミサ典禮

入祭文

我等は、我が主イエズス・キリストの十字架の外は決して誇るごころ無かるべし。

彼に於いて我等は救靈、生命、復活を得、彼によりて我等は助けられ救はれたる者なり。

(詩篇第六十六章の二)

願はくは天主我等を祝し、其の聖顔を我等の上に照らし、且つ我等を憐み給はんことを、我等は……(以下入祭文を詩篇迄繰返し唱へる)

榮光

(の聖歌を歌ふ) (ミサ順序六頁参照)

集禱文

嗚呼天主、ユダは主より其の罪の罰を受け、悔悛めし盜賊は主より其の信仰の褒賞を獲たりき。仰ぎ願はくは吾主イエズス・キリストの御苦難に際りて人々其の善惡によりて酬をうけたる如く、我等の罪科の汚を除き、主の御復活の恩寵にあづからしめ給ふよう、御慈愛を以て待遇ひたまはんことを、天主にて在す、イエズス・キリ

ストに依て冀ひ奉つる ▲「アーメン。」

書簡

(コリント前書、第十一章の二十一―三十二)

然れば汝等が一に集る時は、最早主の晩餐を食せんとには非ず、蓋各前に己が晩餐を食するが故に、飢ゑたる人もあれば酩酊したる人もあり。飲食する爲には自宅あるに非ずや、或は神の教會を輕んじて乏しき人を辱めんとするか、汝等に何をか謂ふべき、汝等をば賞せんか、我之をば賞せざるなり。

蓋我が主より承りて汝等にも傳へし所にては、主イエズス付され給へし夜に當りて麪を取り、謝して之を擘き、然て曰く「十」汝等取りて食せよ、是は汝等の爲に付さるべき我体なり、汝等我記念として之を爲せ」と。晩餐の後同じく杯を取りて曰く「十」此杯は我血に於ける新約なり、飲む度毎に汝等我記念として之を爲せ」と。蓋主の來り給ふ迄、汝等此麪を食し、又杯を飲む度毎に、主の死を示すなり。故

に誰にもあれ、相應しからずして、此麪を食し、或は主の杯を飲まん人は、主の御身体と御血ミを犯さん。然れば人は己を試し、然して後彼麪を食し杯を飲むべし。其は相應しからずして飲食する人は、主の御体を辨へず、己が宣告を飲食する者なればなり、此故に汝等の中には、病める者弱れる者多し、且つ死せる者多し、我等もし自ら審かば審かるゝ事なからん、審かるゝも、其は此世と共に罪せられざらん爲に主より懲され奉るなり。

昇階誦

(フィリッピ書第二章の八、九)

イエズス・キリストは我等の爲に自ら謙りて、死、而も十字架上の死に至る迄、從へる者となり給ひしなり。

是故に神も亦之を最上に擧げて、賜ふに一切の名に優れる名を以てし給へり。

福音書

(ヨハネ聖福音書第十三章の一―十五)

過越の祭日の前、イエズス己が時、即ち此の世より父に移るべき時來れるを知り給ひて、豫ても世に在る己が(弟子)を愛し給ひしが、極まで之を愛し給へり。然て晚餐の終つるに臨み、悪魔既にイエズスを付さん事を、シモンの子イスカリオテのユダの心に入れしかば、イエズス父より萬事を己が手に賜はりたる事、己が神より出でて神に至る事を知り給ひ、晚餐より起上りて上衣を脱ぎ、布巾を取りて腰に帶び、やがて水を銅盤に盛り弟子達の足を洗ひて其帶びたる布巾もて之を拭ひ始め給へり。斯てシモン・ペトロに至り給ふや、ペトロ主よ我足を洗ひ給ふか、云ひしに、イエズス答へて「我爲す處汝今は知らざれども後には之を知るべし」云ひければ、ペトロ云ひけるは、我足を洗ひ給ふ事決してあるべからず、云。イエズス「我若汝を洗はずは、我と一致する所あらじ」と答へしかば、シモン・ペトロ、主よ我足のみなら

ず、手をも、頭をもと云ひしが、イエズス曰ひけるは「十」既に身を洗ひたる人は全身潔くして足の外洗ふを要せず、汝等も潔けれき總てにはあらず」云。蓋己を付す者の誰なるを知り給ひて、汝等悉く潔には非ず云曰ひしなり。然て彼等の足を洗ひ終りて上衣を取り、復席に着きて彼等に曰ひけるは「十」我が汝等に爲しし事の何たるを知るや、汝等は我を師又は主と呼ぶ、其言ふ事や宜し、我はそれなればなり。然るに主たり師たる我にして汝等の足を洗ひたれば、汝等も亦互ひに足を洗はざるべからず、蓋我汝等に例を示したるは我が汝等に爲しし如く、汝等にも爲さしめん爲なり。」

クレド (信經) (ミサ順序五頁参照)

奉獻誦 (詩篇第一一七章十六―十七)

主の右手は其權威を彰せり、主の右手は我を高めぬ、我は死せずして活きん、而し

て主の偉業を宣傳へん。

密 誦

至聖なる主、全能の聖父、永遠の天主、我等 恭しく主に願ひ奉つる。願はくは我等の犠牲が、イエズス・キリスト、即ち此日に於て、此祭式を定めつゝ之を己が記念として爲すべきやう、其弟子に命じ給ひし聖子に依りて、主の聖意に適ふものならんことを、永遠に活き、且統治したまふ主よ。

序 誦 十字架の序誦 (ミサ順序十五頁参照)

(次は「ミサ典文」中(十九頁)「聖人の通功によりて云々」以下の代りに左の如く唱へる)
聖人の通功によりて度しみて記念す。我等は今日の日を我等の主イエズス・キリストが、我等の爲に賣り渡されし至聖なる日となし、且つ特に我等の天主たる、主なる

イエズス・キリストの聖母、終生童貞にして榮譽なるマリア、又同じく主の聖なる使徒殉教者聖ペトロとパウロ、アンドレア、ヤコボ、ヨハネ、トマ、ヤコボ、フリツボ、バルトロメオ、マテオ、シモン、及びタデヲ、又聖リノ、クレト、クレメンヌ、クセスト、コルネリオ、チブリアノ、ラウレンチオ、クリソゴノ、ヨハネとパウロ、コスマミダミアノ及び主の總ての聖人を記念す。願はくは、彼等の功德を執成によりて、總てに於いて、主の御保護の助力を我等に受けしめ給はん事を、我等の主キリストに依りて。▲「アーメン。」

(司祭、捧物に掩手しながら)

されば主よ、願はくは僕たる我と又主の全の家族の捧物を親しく納け容れ給へ。我等この捧物をば、我等の主イエズス・キリストが御弟子等に御身体と御血の秘蹟を行ふを命じ給ひし日の記念として、主に捧け奉つる。蓋は日々我等を主の平安の中に生くるを得せしめ、且つ我等を終りなき亡びより救ひ、主の選ひ給へるものゝ群に加

へられんが爲なればなり。我等の主キリストに依りて。アーメン。

天主よ、此の捧物を總てに於いて祝し、認め、且つ主に相應しきものとして嘉納し給はん事を。蓋は此等は主の最愛なる獨子、我等の主イエズス・キリストの御体ご御血に成り給ふべければなり。

主は我等と萬の物の救靈の爲めに御苦難を受け給ひし前日、即ち今日に於いて、其の聖く尊むべき聖手にて麴を取り、聖眼を天に在す天主たる主の永遠の聖父に擧げ主に感謝し、且つ祝して割き、之を弟子等に與へて曰はく、**皆之を領け且つ食せよ、これ我が身体なり。**又同じく晚餐終りて、この光榮ある祭爵を聖く尊むべき聖手に取り、同じく主に感謝し、且つ祝し之を弟子達に與へて曰はく、**皆之をうけ且飲めよ、之は新しき且永遠の新約の我が血の祭爵なり。**信仰の女義、罪を赦さんて、汝等と衆人の爲めに流さるゝ我が血なり。汝等之を行ふ毎に我が記念として之を行ふべし。

神羔誦

(普通と同じ、但し平安の印なる接吻を省く)

(司祭今日のミサ聖祭中二つの聖麴を聖別す、即ち一つは今日のミサ中の拜領のため一つは聖金曜の聖式の爲めに備ふ)

聖体拜領の誦

(ヨハネ聖福音書第十三章一十二、十三、十五)

主イエズス、其の弟子等と晚餐の後自ら彼等の足を洗ひ、彼等に曰ひけるは、我が汝等に爲しし事の何たるを知るや、蓋我汝等に例を示したるは、我が汝等にも爲しし如く、汝等にも爲さしめん爲なり。

聖体拜領後の文

主、我等の天主、我等恭しく主に求め奉つる。願はくは生命を賦ふる此の食糧に由りて養はれし我を此の儂なき生涯に享けしめ給ふものに依りて、永遠の恵に參から

しめ給はんことを。我等の主、イエズス・キリストに依て。▲「アーメン」

(司祭「往けよ、ミサ終れり」と唱へる)

(司教本聖堂にて聖油の聖別式を行ふ場合には、その典禮文は本書附録の頁参照のこと)

(ミサ聖祭後聖金曜日(聖祭に供へたる聖体は祭壇より壯重な行列を以て假祭壇に遷さる)

(この行列の間次を歌ふ)

一、いざ言葉もて宣べ讃へんかな。

光榮たかき聖体と

貴き御血の奥儀をば

こは世の贖ひと寛大の

諸民の王の御胎より

流れいでにし御血なれ。

二、我等のために與へられ

罪なき童貞女より生まれまして

この現世に生存へて

御教の種をまきて後

その生涯の終局を

奇しき恩恵に結びけり。

三、最終の晩餐の夜にありて

御弟子もろとも食につき

舊約の法にしたがひて

定例の食物撮りたまひ

十二の御弟子に糧として

手づから御身を與へけり

曾て肉となりませる御言は

眞のパンをも一言に御肉となし給ひ

葡萄酒をもキリストの御血となし給へり

そは五官にはふれざれご

眞の心を固めんには

實に信仰のみにて足りるなれ。

五、かく貴き秘蹟をば

我等平伏して崇めまつらん

古の例は

新しきに變り

信仰は五官の

乏しきを補へかし

六、ねがはくは聖父と聖子とに

讚美、歡喜、敬禮と

尊頌、光榮、祝賀のあれ

尙兩位よりいで給ふ

聖靈もひとしく

讚美せられ給へかし。

此後に司祭聖務日課の晩課が唱へられ之が終つて、司祭は補祭及副補祭と共に詩篇第二十一章を交互に唱へながら、主の御苦難に對する悲哀を現すため更に、祭壇にのこる裝飾や掛布を全部取防く。

尙ほ當日或る聖堂に於て適宜の時間に、所謂『足洗式』が行はる。之れ主が最終晩餐の時に弟子達に爲し給ひしを記念するものにして、之によりて主が教へ給ひし愛と謙遜との新しき掟を記憶せしむ。この「足洗式」は教皇を始め、數多の司教、修道院長、又信者の皇帝も、主の鑑に倣ひて行ふ慣例あり。式の順序と聖歌とは本書の附録にあり。

解説

假祭壇に於いて金曜日の聖祭迄、晝夜聖体の秘蹟を拜禮し、主が聖体を制定し給へるを感謝し、又聖体に對する侮辱を償ふ。

聖木、金の兩日には假祭壇の聖体前にて暫時祈禱す。聖木曜日、或は御復活の大祝

日に聖体拜領をなす信者は全贖宥を得。

聖木曜の聖体前にて主の聖体制定を追憶し、感謝の爲め一時間一人或は共同にて祈り、且つ告白聖体の兩秘蹟受ける者は同じく全贖宥を得べし。

聖 金 曜 日

『用意日の金曜』

解 説

聖會は初代より此の日を主の御死去の記念日とす。故に、今日の祭式典禮には無量の感慨あふれ、天主たり人たる主の謙遜、慈悲、忍苦、侮辱を想ひ起さしめ、且つ既に主が此の日において獲給へし最大の捷利をも示し、怖れと戦きと深き悲痛を起さしむ。

今日の重なる女義は、聖十字架の女義にして、此處に人類に對する主の愛は、他の御生涯における偉業よりも一層良く現る。祭服は苦しみの表徴なる黒を用ゐるも、恰も暗夜に美しき星の輝きを見る如く、悲しみの雲につままれる今日の聖金曜日晩に

において、主の御死去に依りて受け得べき天主の平安に對する希望の輝きを見るなり。今日の祭式は三部より成立す。(一)は書簡と聖福音各階級の爲めの祈禱、(二)は聖十字架の崇敬、(三)は省略ミサ。

(一)、書簡は二つあり。第一の書簡はオーセ豫言者が民に改心を奨める數節にして、其意は主キリストが御苦難を受け、死して三日目に復活し給ふが如く、我等も痛悔の苦しみを爲して罪に死すれば、主と共に甦りて、新しき靈的生命に活くべしこの意なり。

又、この書簡は凡て洗禮を受けんとする者にも當る、蓋は聖パウロのロマ書にも(六ノ四)(我等は其死に倣はん爲めに、洗禮を以て共に葬られたるなり。之れキリストが聖父の光榮を以つて、死者の中より復活し給ひし如く我等も又新しき生命の道を歩まん爲めなり」とある如く、受洗は罪に死して聖寵の生命に甦るが故なり。

第二の書簡は舊約に制定られたる過越の羔の記事にして、是は次に誦まれる、聖ヨ

ハネ福音に録されし新約の過越も云ふべき、主の犠牲の象表なり。

又た各階級の爲めの祈禱は、主が十字架において爲されし祈禱に倣ひ、聖會が今日の主の御死去の記念日において、敵味方の區別なく主の御恵を祈るとの意なり。

(二)、聖十字架の崇敬、聖會は「十字架にかけられ給へる、キリストは、ユデア人にとりては躓く者、ギリシヤ人に取りては愚なる事なれども、召されし信者にこりては、神の大能、神の智慧たるキリストなれ」聖書に録されし如く、聖十字架を救主の勝利と、救靈の記號として深く崇敬す。故に我等も聖會の奨めに従ひて、特に今日聖十字架を崇敬し、主に感謝し、且つ主に對する侮辱を償ふべし。

(三)、省略ミサ、聖會は今日ミサ聖祭を執行せず、蓋は今日主が十字架上に在りて血を流しつゝ犠牲を捧げ給ひしを悲しみ、且つ今日のミサに於いて既に復活なし給ひし御身体を以つて、祭壇の上に現れ給ふものなれば之を控えるなり。

今日の聖金曜日祭式に就いては、教皇ベネチクト十四世は「聖會の心は今日の祭式

によりて、十字架に磔られ給ひしイエズスを、我等の目前に想ひ起させ、又我等がこれに痛く感じて、主の贖ひに與る様、我等の心を備へしめんためなり」と曰へり。

祭式典禮

書簡 (オーセ書第六章の一六)

主曰ひけるは、艱難によりて曉には我を尋ねる事をせん。來れ、我等天主に歸るべし。主我等を抓裂き給ひたれども又醫す事をなし、我等を打捨て給ひたれども又その傷をつゝむ事を爲し給ふ可ればなり。主は二日の後に我等を活かすべし。三日には我等を甦らせ給はん。我等其御前にて活きん。この故に我等主を知るべし。主は晨の光の如く必ず現れ出で、雨の如くに我等に臨み、後の季節雨の地を霑す如す我等に格るべし。エフライムよ、我汝に何をなさんや、ユダよ、我汝に何をなさんや、汝等

の慈愛は晨の雲の如く又直に消ゆる露の如し。この故に我、豫言者を以て彼等を打ち我が口の言葉をも以て彼等を殺せり。我が審判は現れ出る光明の如し。我は慈愛を喜びて、犠牲を喜ばず、神を知るを喜ぶ事、燔祭にもまされるなり。

詠 誦 (ハバクク書第三章)

主よ、我主の曰ふ處をききて畏れ主の偉業を眺めて震ふ。主は諸々の年の間に認められ、年來らば現はれ、年來らば自ら顯る。若し我が靈魂は恐怖にあらば、主の怒りの時において、主の御慈愛を思出すべし。主はリバノンの山より臨み給ふ。又聖なる者は深山より來り給ふべし。その偉業は天を覆ひ、その讚美は地に充滿てり。

司祭「祈願せん」補祭「跪かん」副補祭「いざ起たん」

嗚呼天主、ユダは其罪の罰を主より受け。盜賊はその悔悛の報賞を主に獲たり。

願はくはイエズス・キリストが、其苦難の時に當り、其成績に従つて各々を待ひ給ひし

如く、我等をも罪科の汚漬を除きて、聖靈の一致に於て、主と偕に永遠に統治し給ふイエズス・キリストの復活の恩寵に與からしめ給はん爲め、聖寵を垂れて、主の愛憐の効果を我等に感知しめ給はん事を。▲「アーメン」

書 簡 (出埃及記第十二章の一十一)

其の時、主、エジプトの國に於てモイゼミアロンに告げ曰ひ給ひけるは、「此の月を汝等の月の始とせ。汝等は是を年の正月となすべし、汝等イスラエルの全會衆に告げて云ふべし。此の月の十日に、家長たる者、各自の羔を取るべし。即ち家毎に一疋の羔を取べし。もし家族少くして、其の羔を食ひ盡す事能はずば、その家の隣なる人と共に、人の數に従ひて之を取るべし。各人食ふ所に従ひて、汝等羔を計るべし。汝等の羔は、疵なき當才の牡なるべし。汝等綿羊又は山羊の中よりこれを取るべし。而して此の月の十四日迄、之を守り置き、イスラエルの會衆みな薄暮に之を屠り、其

の血を取て、之を食ふ家の門口の兩の柱に塗居に塗り置くべし。而して此の夜其肉を火に炙きて食ひ、又酵なきパンに、苦菜をそへて食ふべし。是れを生にても又水にて煮ても食ふ勿れ。火に炙くべし。其頭と脚と臍とを皆食へ。其の明朝迄残しておく勿れ。明朝迄残れる者は火にて焼つくすべし。汝等斯して之を食ふべし。即ち腰を引きからけ、足に鞋をはき、手に杖を取りて急ぎて之を食ふべし。』是主の過越なればなり。

詠 誦

(詩篇第百卅九章の二十、十四)

主よ、ねがはくは罪人より我を援けいだし、我を守りて強暴人より逃れしめたまへ。彼等は心の中に謀計を企て、終日戦鬪を起すなり。彼等は蛇のごとく、己が舌を利きその唇のうちに蝮の毒あり。主よ、願はくは我を悪しき人の手より逃れしめ、我を守りて我足をつまづき強暴者の謀略より逃れしめ給へ。亢る者は我が爲めに、罔と

索とを伏せ、路のほごりに網をはりつゝ機會をうかゞへり。我主に云へらく、汝は我神なり、主よ、願はくは我祈の聲をきゝ入れ給へ。我救の力なる主なる天主よ、汝は戦鬪の日に我が首を被ひたまへり。主よ、罪人の欲ひのまゝにする事を許し給ふ勿れ。その悪き謀計を遂げしめ給ふ事勿れ。恐らくは彼等自ら誇らん。我を圍む者の首と、その唇の働きは彼等を覆はん。實に、義人は主の聖名に感謝し、直き者は主の御前に住まん。

ヨハネ聖福音書に於ける

吾主イエズス・キリストの御苦難

(ヨハネ、聖福音書第十八章―第十九章全部)

イエズス、弟子達と共にセドロンセドロンの溪流溪流の彼方彼方に出で給ひしが、其處其處に園園の在りけるに、弟子達を伴ひて入り給へり。イエズス 屢屢弟子と共に此處此處に集り給ひければ、

聖金曜日 ヨハネ聖福音書に於ける吾主イエズス・キリストの御苦難

彼を賣れるユダも處を知り居たり。

然ればユダは、一隊の兵卒及び下役等を大司祭ファリサイ人より受けて、提灯と炬火と武器とを持ちて此處に來れり。イエズス我身に來るべき事を悉く知り給ひて、進出でて彼等に向ひ「十」誰を尋ぬるぞ」と曰ひしかば彼等、ナザレトのイエズスを、ご答へしにイエズス「十」其は我なり」と曰ひしが、彼を付せるユダも彼等と共に立ち居たり。然てイエズスが我なりと曰ふや、彼等後退して地に倒れたり。イエズス乃ち復「十」汝等誰を尋ぬるぞ」と問ひ給ひしに彼等、ナザレトのイエズスを、ご云ひたれば、イエズス答へ給ひけるは「十」我既に我なりと汝等に告げたり、我を尋ぬるならば此人々を容して去らしめよ」と。是會て「十」我に賜ひたる人々を我一人も失はざりき」と曰ひし御言の成就せん爲なり。

時にシモン、ペトロ劍を持ちたりしかば、抜きて大司祭の僕を撃ち、其右の耳を切り落ししが、其僕の名をマルクスと云へり。然てイエズス、ペトロに曰ひけるは「十」汝

の劍を鞘に收めよ、父の我に賜ひたる杯は我之を飲まざらんや」と。斯て兵隊、千夫長、及びユデア人の下役等、イエズスを捕へて之を縛り、先アンナの許に引行けり。是其年の大司祭たるカイファの舅なるが故なり。カイファは會てユデア人に向ひて一人が人民の爲に死するは利なり、との忠告を與へたりし人なり。然るにシモン、ペトロ、及び他の一人の弟子、イエズスの後に従ひたりしが、彼弟子は會て大司祭に知られたりければ、イエズスと共に大司祭の庭に入りしも、ペトロは門の外に立ちてありしに、彼大司祭に知られたりし弟子出でて門番の婦に語らひしかば、ペトロを内に入れたり。斯て門番の婦ペトロに向ひ、汝も彼人の弟子の一人ならずや、ご云ひしに彼、然らずご云へり。時しも寒かりければ、僕及び下役等、炭火の傍に立ちて煖り居るに、ペトロも立交りて煖り居たり。

然て大司祭は其弟子と教に就きてイエズスに問ひしかば、イエズス之に答へ給ひけるは「十」我は白地に世に語り、何時も凡てのユデア人の相集まる會堂及び(神)殿に

て教へ、何事をも密に語りし事なし、汝何ぞ我に問ふや、我が語りし所を聴聞したる人々に問へ、彼等こそ我が言ひし所を知るなれ』と。斯く曰ひしかば、立會へる一人の下役、手にてイエズスの頬を打ち、汝大司祭に答ふるに斯の如きか、と云ひしを、イエズス答へ給ひけるは、**十**我が言ひし事悪くば其の悪き所以を證せよ、若善くば何爲ぞ我を打つや』と。斯てアンナはイエズスを縛りたる儘に、大司祭カイファの許に送りたりき。

然てシモン、ペトロ火に焼りつゝ立てるに、人々、汝も彼が弟子の一人ならずや、と云ひしかばペトロ否みて、然らずと云へり。又一人、大司祭の僕にしてペトロに耳を切落されし人の親族なる者、我汝が園にて彼に伴へるを見たるに非ずや、と云ふをペトロ又否みたるに、**鶏**忽ち鳴へり。

斯て人々、イエズスをカイファの許より官廳に引きしが、時に天明なりき。彼等は汚れずして過越の犠牲を食し得ん爲に、其身は官廳に入らざりしかば、ピラト彼等居る所に出でて、汝等彼人に對して如何なる事を告訴するぞ、と云ひしに彼等答へて彼若惡人ならずば我等之を汝に付さざりしならん、と云ひければ、ピラト彼等に向ひ汝等之を引受けて、汝等が律法の儘に審け、と云ひしにユデア人、彼等は人を殺す事を允されず、と云へり。是イエズスが會て、如何なる死狀を以て死すべきかを、示して曰ひし御言の成就せん爲なりき。是に於てピラト再び官廳に入り、イエズスを呼出して、汝はユデア人の王なるか、と云ひしに、イエズス答へ給ひけるは**十**汝之を己より云へるか、又人我に就きて汝に告げたるか』ピラト答へけるは、我豈ユデア人ならんや、汝の國民と大司祭等と汝を我に付したるが、汝何を爲したるぞ。イエズス答へ給ひけるは**十**我國は此世のものに非ず、若我國此世のものならば、我をユデア人に付されじとて、我臣僕は必ず戦ふならん、然れど今我國は茲のものならず』と。斯てピラト、イエズスに向ひ、然らば汝は王なるか、と云ひしにイエズス答へ給ひけるは**十**汝の云へる(が如し)、我は王なり。我之が爲に生れ、之が爲に世に來れり、

即ち眞理に證明を與へん爲なり、總て眞理に據れる人は我聲を聴く』と。ピラト、イエズスに謂ひけるは、眞理とは何ぞや、と。

斯く云ひて再びユデア人の所に行き、彼等に云ひけるは、我彼人に何の罪をも見出さず、但し過越祭に當りて、我汝等に一人を赦すは、汝等の慣例なるが、然らばユデア人の王を我より赦されん事を欲するか、と。是に於て彼等復一同に叫びて、其人ならでバラバを、と云へり、バラバは即ち強盜なりき。

其時ピラト、イエズスを捕へて之を鞭ち、兵卒等は茨の冠を編みて御頭に冠らせ又赤き上衣を着せ、然て御前に至りて、ユデア人の王よ、安かれ、と云ひて手を以て御頬を打ち居たり。斯てピラト復出來り、人々に向ひて言ひけるは、我が何の罪をも彼に見出さざるこそを汝等に知らしめん爲に、看よ彼を汝等の前に引出すぞ、と。此に於てイエズス、茨の冠赤き上衣にて出來り給ひしかば、ピラト、看よ人を、と云ひしに、大司祭及び下役等、イエズスを見るや叫出でて、十字架に釘けよ、十字架に

釘けよ、と云ひければピラト、汝等自ら之を執りて十字架に釘けよ、我は何の罪をも之に見出さざるを、と云ひしに、ユデア人答へけるは、我等に律法あり、其律法によりて彼は死せざるべからず、其は己を神の子としたればなり、と。ピラト此語を聞きて益々懼れ、復官廳に入りてイエズスに向ひ、汝は何處の者ぞ、と云ひしかば、イエズス答へ給はざれば、ピラト云ひけるは、汝我に言はざるか、汝を十字架に釘くるの權も、亦免すの權も、我に在る事を知らざるか、と。イエズス答へ給ひけるは、**十** 汝上より與へられたるに非ずば、我に對して何等の權あらんや。我を汝に付したる者の罪、是に於てか更に大いなり』と。

是よりピラト復イエズスを免さん謀り居たれども、ユデア人叫びて、汝若此人を免さばセザルの忠友に非ず、凡て己を王とする人はセザルに叛く者なればなり、と云ひければ、ピラト斯る言を聞きてイエズスを伴出し、切嵌の敷石、ヘブレヲ語にてはガバダと云へる處にて、審判席に就けり。恰も過越祭の用意日にして、十二時頃な

りしが、ピラト、ユデア人に向ひ、看よ汝等の王を、ミ云ひしに彼等、取除けよ、取除けよ、十字架に釘けよ、ミ叫び居ければピラト彼等に、我豈汝等の王を十字架に釘けんや、と云へるを大司祭等、セザルの外我等に王なし、と答へたり。

斯てピラト、十字架に釘くる爲にイエズスを彼等に付しければ、兵卒等之を執りて引出しが、イエズス自ら十字架を負ひ、彼髑髏へブレオ語にてゴルゴタミ云へる處に出で給へり。彼等此處にて之を十字架に釘け、又別に二人を左右に、イエズスをば中央にして磔けたり。

然るにピラト亦罪標を書きて十字架の上に置きしが、ユデア人の王ナザレトのイエズス、ミ記されたりき。イエズスの十字架に釘けられ給ひし處は市街に近くして、罪標はへブレオとギリシヤミラテンの語にて書きたれば、ユデア人の中に之を讀みたる者多し。然ればユデア人の大司祭等ピラトに向ひ、ユデア人の王と書かずして、ユデア人の王と自稱せし者ミ書き給へ、と云ひしをピラトは、我が書きし所は書きし

(儘なれ、)ミ答へたり。

斯て兵卒等、イエズスを十字架に釘けし後、其衣服ミ下衣とを受け、衣服は四分して一人に一分づゝ分ちしが、下衣は上より一つに織りたる縫目なき物なりしかば、之を裂かずして、誰のなるべきか鬮引にせんと言合へり。是聖書に録して「彼等は互に我衣服を分ち、我下衣を鬮引にせり」ミある事の成就せん爲にして、即ち兵卒等は實に此事を爲せるなり。

然てイエズスの十字架の傍に、其母と母の姉妹、即ちクレタファの(妻)アリアと、マгдаレナ、マリアミ立ちてありしが、イエズス其母ミ愛せる弟子との立てるを見給ひて母に向ひ、婦人よ、是汝の子なり、と曰ひ、次に弟子に向ひて、是汝の母なり、と曰ひければ、此時より其弟子イエズスの母を我家に引取りたり。

聽てイエズス何事も成り終れるを知り給ひて、聖書の成就し果てん爲に「我渴く」ミ曰ひしが、其處に醋の満ちたる器置かれてありしに、兵卒等海綿を醋に浸し、イソ

ブに刺して其口に差付けしかば、イエズス醋を受け給ひて「土成り終れり」と曰ひ、首を垂れて息絶え給へり

時は用意日にて大安息日の前なれば、安息日に屍の十字架上に遣らざらん爲に、其脛を折りて取下さん事を、ユデア人ピラトに願ひしかば、兵卒等來りて、先なる者及び共に十字架に釘けられたる他の一人の脛を折りしが、イエズスに至り、其既に死し給へるを見て、脛を折らざりき。然れど兵卒の一人鎗もて其脇を披きしかば、直に血と水と流出でたり。目撃せし人之を證明せしが、其證明は眞實にして、彼は其云ふ所の眞實なるを知れり、是汝等にも信ぜしめん爲めなり。此等の事の成りしは、聖書に「汝等其骨を一も折るべからず」とある事の成就せん爲めなり。更に又聖書に曰く「彼等は其貫けるものを仰ぎ見ん」と。

(聖福音の如き調子で歌ふ)

其後アリマテアのヨゼフ、ユデア人を憚りて密にはすれども、イエズスの弟子なれ

ば、其御屍を引取らん事をピラトに願ひしに、ピラト許しかば來りてイエズスの御屍を取下せり。又嚮に夜イエズスに至りしニコデモも、没薬と蘆薈との混和物を百斤許携へて來りしが、兩人イエズスの御屍を受取り、ユデア人の葬の習慣に従ひて香料と共に布にて之を捲けり。

然てイエズスの十字架に釘けられ給ひし處に園ありて、園の中に未だ誰をも葬らざる墓ありければ、彼等はユデア人の用意日なるに因り、墓の手近きに任せて、イエズスを其處に殮めたり。

各階級の爲の祈禱

愛する兄弟等よ、天主の聖會の爲に祈らん。我等の主なる天主が萬國に於ける聖會を守護し之に平安と一致を保たしめ、又勢力と主權をも服せしめ、我等には安かに靜なる生活を営ませ給ひて、全能の父なる天主を讚美するを得せしめ給はん事を祈り

奉つらん。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、主はキリストに於て主の榮光を萬民に現し給ひしに由りて、主の御慈愛の偉業を守り給へ。主の聖會が普く全地に擴り、堅固なる信仰を以て主の聖名を宣言し、永く治め保たしめ給はん事を、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて冀ひ奉つる。▲「アーメン。」

我が聖なる教皇(御名を加ふ)の爲めに祈らん。我等の主なる天主が、彼を司教の階級に選ひ給ひしに依りて、彼が聖會の爲めに主の聖なる民を司牧せんが爲め、彼をして靈肉俱に健全ならしめ給はん事を祈り奉つらん。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、總ての成就是主の御攝理に由るものなるにより、願はくは御慈悲を以て我等の祈願をかへりみ給へ。選ばれたる教皇をば御哀憐によりて永く保たせ給

はん事を、又主の主宰によりて彼が司る、キリストを信仰する民をして信仰の功績を増さしめん爲め、教皇を永く保たしめ給はんことを、我等の主イエズス・キリストによりて願ひ奉る。▲「アーメン。」

總ての司教、司祭、補祭、副補祭、待者、拔魔、讀經、守門、證聖者、童貞者、婦婦、總ての聖なる主の民の爲に祈らん。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、主の聖靈に由りて聖會の總體は聖ごされ、治めらるゝが故に、主の聖寵の功德に由りて、各階級が主に忠實に仕へんがため、願はくは我等が各階級の爲めになす祈禱をきゝ入れ給はんことを。我等の主イエズス・キリストに依りて。

▲「アーメン。」

我等の志願者の爲めに祈らん。我等の主なる天主が、彼等の心耳と主の御慈悲の門を開き給はん事を。蓋は彼等が再生の水によりて總ての罪の赦しを蒙り我等の主イエ

ズス・キリストと一致せんがためなり。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、主は其聖會に、絶えまなく其の子等を與へ給ふに依り、願はくは彼等が洗禮の水に由りて新に生れ、主の愛子の中に加へられんため、我等の志願者の信仰と智識を増し給はん事を、我等の主イエズス・キリストに依りて冀ひ奉つる。

▲「アーメン。」

我等の最愛なる兄弟達よ、我等全能の父なる天主に祈らん。主が世を總ての謬説より潔め、疾病を取り除き、饑饉を防ぎ、牢獄を開き、俘虜の縛めを解き、又旅人には歸還を、病める者には健康を、舟人には救ひの港を與へ給はん事を祈らん。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、主は悲しめる者の慰藉、働く者の耐力にて在すが故に、願はくは凡ての者がその困難に於いて、主の慈しみに由り助けられたるを喜ばん爲めに、萬事

の愛にありて、主に叫ぶ者の祈禱を主の御前にいたらしめ給はん事を、主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて、▲「アーメン」又異端者及び離教者の爲めに祈らん。我等の主なる天主が、彼等をその總ての異教より救ひ、彼等を母にして使徒傳來たる聖公教會に呼び戻し給はんことを祈り奉つらん。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

全能永遠の天主、總ての者を救ひ、其の一人をも亡びに至るを望み給はざるにより願はくはその囹に掛りて詭されたる靈魂をかへりみ給へ。蓋は迷へる心は凡て異教の誤謬を捨て、想を革め、主の眞理の一致に歸へらんが爲めなればなり。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名に依りて。

▲「アーメン。」

不忠なるユデア人の爲にも祈らん。我等の主なる天主が、彼等の心より幕を取り去

りて、彼等にも我等の主イエズス・キリストを認めしめ給はん事を祈り奉つらん。

(此處にて『祈願せん』『跪かん』『イザ起たん』を唱へす。これユデア人が主の御苦難と御死去の時に主を辱しめんとして跪きたるが故なり)

全能永遠の天主、主は其の御哀みにより不忠なるユデア人も遠け給はざるが故に願はくは彼の旨なる民の爲めに、我等が主に捧げ奉つるの祈禱をきゝ入れ給へ。又彼等に主の眞理の光なるキリストを認めしめ、且つその暗黒より引き出し給へ。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの御名に依りて。▲『アーメン』

異邦人の爲めにも祈らん。全能なる天主、彼等をして邪なる業をその心より取り除き給はん事を。彼等が其の迷へる神々を去りて、活ける眞の神と、其の御獨子、我等の主イエズス・キリストに歸らん事を祈り奉つらん。

司『祈願せん』 補『跪かん』 副『いざ起たん』

全能永遠の天主、主は悪人の死を好みたまはず、彼等が其の生命に至らんことを常に求め給ふに依り、乞ひねがはくは、御慈悲によりて我等の祈りを聴き容れ、彼等をその迷へる神々の崇拜より救ひ、主の聖名の讚美と光榮の爲めに彼等をも聖會に加へしめ給へ。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて、▲『アーメン』

聖十字架の崇敬

司祭『世の救靈の掛り給ひし十字架の柱を見よ』歌隊(跪きながら)『來れ、我等拜禮しまつらん』(三回)

(司祭十字架を祭壇の下に特別の場所に置き、先づ司祭と侍者は、この十字架に近づきながら三度跪きて崇敬を表はし、三回目の時主の御足に接吻す。其後信者は二人宛列びて、司祭の指圖に従ひ同じやうに崇敬す。其間次の十字架崇敬の連誦を歌ふ)

聖十字架崇敬の連誦

(此の祈文はユデア人及び不信なる人々の救主に對する侮辱を咎める唱へなり)

吁我人民よ、我汝等に何を爲せしぞ、何に於いて汝等を悲しませしぞ、我に語れ。

我汝等をエジプトの地より導きしに、汝等はその救主に十字架を備へたり。

「嗚呼聖なる天主よ。」

「嗚呼聖にして強き天主よ。」

「聖にして不死なる天主よ。」

「聖にして不死なる天主よ。」

我四十年の間絶えず砂漠の中に汝等の嚮導者となり「マンナ」を以て汝等を養ひ、

豊饒なる地に汝等を入れしに、汝等は其救主に十字架を備へたり。

「嗚呼聖なる天主よ。」

我汝等の爲めに爲すべきものにして爲さざりしものありしや。汝等は、我親ら植ゑし最と美しき葡萄園ならずや、而も汝等は我が爲に悉く苦味を有てり、そは汝等我渴ける時に醋を與へ、槍を以て汝等の救主の脇腹を貫きたればなり。

「嗚呼聖なる天主よ。」

我汝等を愛する爲め、エジプトを其世嗣と共に搏しに、汝等は我を鞭撻たせんこて交付したりき。

「吁我人民よ。」

我はファラオンを紅海に淪めて汝等をエジプトより引出せしに、汝等は我を司祭長等に交付したりき。

「吁我人民よ。」

我汝等の爲めに通路を海の中に開きしに、汝等は槍を以て我脇腹を突き開きぬ。

「吁我人民よ。」

聖金曜日 聖十字架崇敬の連誦

我汝等の征路の間密雲の柱を汝等の前に進ましめて汝等を導きしに、汝等は我をピラトの裁判庭に引き行けり。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

我砂漠に於てマンナを以て汝等を養ひしに、汝等は我に侮辱と打擲を與へたり。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

我巖より出でし清き水以て汝等の渴を醫せしに、汝等は我に酢と苦膽とを飲ましめたり。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

我汝等を愛するより、カナアンの王達を撃ちしに、汝等は葦を以つて我顔を擲ちたりき。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

我汝等に王笏を與へしに、汝等は荊茨の冠を我頭に冠らせたりき。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

我汝等を榮譽と光榮に擧げしに、汝等は我を十字架の刑臺に縛めたり。

「吁我人民よ」(云々前に同じ)

主よ、我等主の十字架を拜禮し、主の聖き復活を稱讚し奉つる。蓋は十字架の樹によりて、全世界は歡喜に充されたればなり。

願はくは天主我等を憐み、我等を祝し、其の聖容の光を以て我等を照らし、其の御慈悲を我等に感知しめ給はんことを。

主よ、我等主の十字架を拜禮し、主の聖き復活を稱讚し奉つる。蓋は十字架の樹に由て全世界は歡喜に充されたればなり。

聖十字架の稱讚

呼眞實なる十字架、凡てにまされる尊き樹よ、其の葉、其の花、其の果實は、何

處の森もその比儔を産さず、貴重なる樹、神聖なる釘、汝が擔へるはかくも温和なる荷なり。

歌へ、我舌、いごも名高き榮譽の鬨をなしたる者を、其戦利品として十字架を獲たる貴き凱旋を、語れ、いかに、世の救贖主が屠られつゝ勝利を得しかを、

『吁眞實なる十字架、凡てにまされる尊き樹』(云々前に同じ)

不運の果實を食ひしたために死の中に投入られし、我等が父なる元始の人間の不幸を憐みて、造物主は、この日に於いて、樹より生ぜし不幸を恢復せんとて、木(十字架)をば現し給ひけり。

『貴重なる樹、神聖なる釘』(云々前に同じ)

我等が救靈の事業の順序は斯くありき、神の技工は我等を欺きし悪魔の偽計を矯正し、創を癒すの薬は其の生ぜし處より來ることを要しけり。

『吁眞實なる十字架、凡てにまされる尊き樹』(云々前に同じ)

聖き時期の充ちし日、宇宙の造者なる天主の聖子は、其の聖父より遣され、童女の胎内に肉と化りてぞ生れける。

『貴重なる樹、神聖なる釘』(云々前に同じ)

幼孩は秣槽の内に産聲をば揚げ、其の母なる童女は襁褓につゝめるその肢體を擁け持ち、天主の聖手足は狭き布片にて被はれたりき。

『吁忠實なる十字架、凡てにまさる尊き樹』(云々前に同じ)

六度の五年を活せし後、彼の死すべき命は近づき、我等の救贖主としてきたれる主は、其身を苦難に交付すを甘じ、羔は供へられん爲め十字架の樹の上に攀けられぬ。

『貴重なる樹、神聖なる釘』(云々前に同じ)

其の終焉に際りて、苦膽を飲まされ、荆茨に釘し槍とは其の臆弱なる体を壞ぶり、其の脇腹より血と水は流れ出でけり。是陸に海、星宿と全地を淨むる河にてある也。

『吁忠實なる十字架、凡てにまされる尊き樹』(云々前に同じ)

貴き樹よ、汝が下に集へる會衆を慰さむるため汝が枝をばたれよ、無上の王の悲痛を輕むるため汝が堅硬を自ら軟らけよ。

「貴重なる樹、神聖なる釘」(云々前に同じ)

世の犠牲をもたらし、破船の憂目にある人類を埠頭にみちびく救靈の船となり、羔の貴き血をば湛ふるに堪ゆるは汝のみなれ。

「吁忠實なる十字架、凡てにまされる尊き樹」(云々前に同じ)

福なる聖三位に無窮の榮光あれ、聖父と聖子と慰藉主なる聖靈に均しく榮光あれ願はくは世を擧りて聖三位の各位の御名を讚美せん事を。アーメン

省略ミサ

(司祭假祭壇より聖体を遷す此の聖体行列の間次の聖歌歌はる)

聖十字架の讚美

一、王の聖旗は翻へり

十字架の神祕的象徴は輝き出で、

肉体の造主は

肉体もてぞ磔られ給へり。

四、美しく輝ける木よ

汝が姿は

王の眞紅の衣もて裝飾られ

聖き肢体にふさわしく選ばれたり。

「神は木(十字架)にて王たり給ふ」(イ)

二、苦難に又更に

苦難は重なりて

鋭き鎗先に、血と水は

我等を罪より洗はんこて流れけり。

五、幸福なる哉、汝が横木に

世の贖ひは掛り給へり

汝は主の御肉体の計器となりて

悪魔の勝利品を取戻したり。

三、ダヴド王の深き信仰の歌は

こゝろこゝろ成就せられたり

彼は諸々の民等に誥けり

六、慶たし、この受難において

唯一の希望なる聖十字架よ

七、最高くして三位一体なる天主よ

善人には聖寵を増し、

總ての靈は主を頌め稱へん

罪人には赦免を與へよ。

十字架の神祕的象徴に救はれし者に
主は永遠に王たり給へ。アーメン

(司祭聖体を祭壇の上にある聖体布に置いて、聖体と祭壇とに撒香しながら唱へる)

主よ、祝せられしこの薫香が主に昇らん事を、又我等の上に主の御慈悲の降らんことを。

(祭壇を撒香しながら) 詩篇(第四百十章二一三)

主よ、願はくは薫香の如く我が祈りを御前に捧げ、夕の燔祭の如く我が手を舉げて御前に捧げしめ給へ。天主よ、願はくは我が口に門守をおき、我が唇の扉を衛り給へ。己が罪を辯疏ひて悪き言葉にわが心を傾かしむること勿らしめ給へ。

(司祭、香爐を侍祭に返す時)

主が我等の心にその愛の火と永遠の熱心の焔を燃わしめ給はん事を。アーメン。

(司祭無言にて手を洗ひ、後に祭壇の中央にて)

主よ、願はくは深く謙遜り、且つ痛悔の心を以て身を捧げ奉つる我等を受け給へ。

主なる天主、我等の犠牲をして今日御尊前に於いて全く御心に叶はしめ給へ。

(司祭拜聴者に向つて)

兄弟等よ、我ら汝等の捧物が全能の父なる天主に協ふやうに祈り奉れ。

(司祭祭壇の中央にて歌ふ)

祈願せん

我等は命令に獎められ、且つ天主の制定に教へられて敢て主に祈り奉る。
天に在す我等の聖父よ、願はくは聖名の尊まれん事を、御國の來らん事を、聖旨の

天に行はるゝ如く、地にも行はれん事を、我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等が人に赦す如く我等の罪を赦し給へ、我等を試みに引き給はざれ、▲「我等を惡より救ひ給へ」アーメン。

(司祭聲を上げて)

主願はくは總ての過去、現在、未來の惡より救ひ給へ。永福にて終生童貞なる、天主の御母聖マリア、使徒聖ペトロ聖パウロ及び聖アンドレア、及び諸聖人の傳達によりて豊なる御隣みの助力に依り、何日にも總ての罪より救ひ、安全なる地帯に入れしめん爲め、今も慈悲を以て平和を與へ給はんことを。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉る。

▲「アーメン」

(司祭聖体を右手にて顯示し、その後祭爵の上にて祈りを唱へず、聖体を三つに折りて、この中の一つを祭爵に入れ、その後聖体拜領の祈りを唱へる)

主イエズス・キリスト、我主の御体と御血を拜領するには足らざる者なれども、願はくはこの拜領に依りて我等を審判と地獄より免れしめん爲め、却つて御慈愛を以つて靈肉を護らせ、且つ之れを我が聖藥ならしめ給はんことを、聖父なる天主と聖靈と偕に永遠に生き且つ統治し給ふ主よ、アーメン。

我れ天上のパンを領け、主の聖名を呼ばん。

「主よ、我は不肖にして主を吾が舎下に入るゝに堪へず、只一言をだに宣はば我が心癒えん。」(三回)

願はくは我が主イエズスの御体、我が靈魂を永遠の生命に守り給はん事を。アーメン

(聖体拜領す)

主よ、口にて拜領に與かりし者には、清淨潔白なる心を以つて受けしめ給へ。現世にて與へられし賜を、我等の永遠の聖藥とならしめ給へ。

(司祭、祭壇の前にて敬禮して退去す)

聖土曜日

「聖なる安息日」

解説

此の聖土曜日を別に「聖なる安息日」も云はれるは、主イエズスの御屍が聖堂に安息しありし日なる故にして、聖會は古此の日を聖曆年中最も靜肅の日とせり。初代に於て聖會は此の日に聖母及び使徒等の悲哀を特に偲びてミサ聖祭を行はざりしも、今日の夕方より翌日の御復活祭の準備として徹夜の祭式を行へり。而して此の式は夜明頃におよびしを以て、式の結末に行はれるミサ聖祭には次第に御復活の聖き歡喜の氣分現はるゝなり。

現今此の徹夜の祭式は今日聖土曜日の朝に行はるゝも、祭式は全部昔のまゝなるを

以つて、式中に「此の夜」又は「此の夜の光明」等の文句あるは其故なり。

又、初代には此の聖土曜日の徹夜の祭式中四旬節間に準備せる志願者の洗禮式行はれたり。之は復活祭當日における信者の頭なる主の御復活を祝ひ、且つ受洗者が主と共に新しき生命に復活せるを祝ふためなり。式中主の御復活は火と復活祭ローソクの祝別に象られ、受洗者の靈的復活は、洗禮用聖水の祝別と受洗者の洗禮式に象らる。

聖土曜日の祭式は次の六つの部分より成立す。

- (一) 火と香の祝別
 - (二) 復活祭ローソクの祝別
 - (三) 十二の豫言の朗讀
 - (四) 洗禮用聖水の祝別
 - (五) 洗禮秘蹟の執行
 - (六) ミサ聖祭
- (以上の悉しい解説は各部の初にあり)

火と香の祝別式

解説

初代には當日の祭式は夜分に行はれたる爲め、火を燧石より起し之を祝別して用ひたるに始まる。火は光の如く暗夜を照らし光なるキリストを象り、又、燧石は聖會の隅石(礎)なるキリストの象徴なり。

尙ほ今日祝別される香は五粒のみなるが、これは復活し給ひし主の御体に輝く五つの疵痕の象徴なり。

(司祭聖堂の扉の前にて燧石にて起せし火を祝別す)

『願はくは主汝等と共に在さん事を』 ▲又汝の精神と共に在さん事を』

祈願せん

主は、隅石に在す御一人子によりて、主の光榮の火を信者に與へ給ひしにより、願

はくは此處に我等の使役の爲め燧石にて起したる、この新しき火を聖ならしめ、我等をして清き心以て永遠の光榮の祝賀に到らしめん爲め、この主の御復活の祝賀に於て我等に天上を望ましめ給はん事を、我等の主イエズス・キリストに依りて。

▲『アーメン』

祈願せん

全能の父、天主なる主、總ての光の創造主にて在す消えざる光よ、全世界を照し給へる主よ、願はくは祝し給へるこの光を祝別し給へ。蓋は我等がこの火にて燃され、又主の光榮の火に照されん爲なり。主がエジプトより出でしモーゼを照し給ひし如く我等をして永遠の生命と光に至るに相應しからしむるやう、我等の心と五官を照し導き給へ。我等の主イエズス・キリストに依りて。▲『アーメン』

祈願せん

聖なる主、全能の父、永遠の天主よ、主の聖名と主の御獨子なる我等の主イエズス
キリストと聖靈に由りて、この火を祝する我等に協力し給へ。願はくは悪魔の火
に對して我等を助け、且、天の聖寵もて照し給はん事を、主と聖靈と偕に世々生存へ
統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストに由りて願ひ奉る、▲「アーメン」

(司祭、復活祭ローソクに入るべき五粒の香を祝別す)

全能の天主、願はくはこの薫香の上に、主の豊なる祝福の注がれん事を。見えざ
る改造者なる主よ、此の夜の光を燃やしめ給へ。蓋は此の夜行はれる聖祭が主の神祕
的御光りによりて照さるゝのみならず、此處に聖別せられし火が運ばれし何處の場所
にても、悪魔の囹を防ぎ、主の偉大なる御力によりて佑助ならん爲なり、我等の主
イエズス・キリストに依りて、▲「アーメン」

(司祭は此處にて聖水と香にて火を祝す)

詩篇 (第五〇章一八)

「主よヒソブもて我に注ぎ給へ、さらば我潔まらん、我を洗ひ給へ、さらば我雪より
も白からん」

(行列にて聖堂内に入り、副祭は三回歌ふ)

「キリストの光」 ▲「天主に感謝し奉る」 (三回)

復活祭の蠟燭祝別式

復活祭のローソクの祝別式は復活祭の徹夜の特別な莊嚴な部分にして、光榮を以つて墓
より甦り給ひし主を象徴する。尙ほ今日の祝別式に用ゐられる内容、節奏共に美しき讚美歌
は聖オグスチノの作なりと傳ふ。

(祭壇前にて補祭は司祭の掩祝を願ふ)

「尊き靈父の掩祝を乞ひ願ふ」

(司祭)『主の御復活の讚美を正しく且相應しく告げん爲に、主は汝の唇と共に在さん事を、聖父と聖子と聖靈の御名によりて、アーメン。』

(補祭歌ふ)

いざ天使の群集よ、歡喜び勇みて天主の玄義を歡喜び樂しめ、
救靈のラツバよ、響き渡れ。

偉大なる王の勝利を告げんが爲めに、
美しき天の光に照らされたる地球よ、歡喜び躍れ。

永遠の王の光榮に照り輝ける地球よ、
全世界の暗黒の消え去りしを感知へよ。

燦めく光線に彩られたる母なる聖會も、歡喜び讚美へよ、
この集ひの殿も、集へる民の聲に搖けよ。

さらば愛する兄弟よ、我と諸共、

願はくはこの妙じき聖光の光榮に於いて、族に全能の天主の御慈悲をよびくたせ。
そは、主が功無き我をも顧み給はずレビの族に加入れ給ひしは、
其のまばゆき光榮を注ぎて、

このローソクの讚美をば完うせしめ給はんにてなり。

主の聖子、我等の主イエズス・キリスト、聖父と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、
是の御子イエズス・キリストの聖名により願ひ奉つる。▲「アーメン」

「願はくは主汝と共に在さん事を」 ▲「又汝の精神と共に在さん事を」

「心を上げて主を仰ぐべし」 ▲「我等の心主を仰ぎ奉つる」

「我等の主なる我等の天主に、感謝し奉つる」 「善く且正しき事なる哉」

實に善く正しきことなる哉、

見えざる神、全能の聖父、又其の御獨子、我等の主イエズス・キリストを、
歡喜び勇躍に充てる精神と聲もて、心ゆくまで讚めたまへ奉つる事は。

主は我等の身代りとなりて、永遠の聖父の御前に、
アダムの罪を贖ひ、人祖の罪に負債の證をばその尊き御血もて消し給ひぬ。
これぞ實に過越の祝ひなり。
かくて眞の羔は屠られ、其の流れ給ひし御血によりて、
信徒の門なる柱と鴨居は祝せられぬ。
この夜始めて、主は我等を、
我等の先祖のイスラエルの子等をばエジプトより導きいだし、
水には霧だに觸れしめず、紅海を歩ましめ給ひしに異ならじ。
この夜は、罪人の暗黒をば、火柱の輝きに淨め給へるが如し。
この夜は、キリストを信する地上の民等を、
世の缺點と罪と暗黒の喘ぎより離れしめ、聖寵に返し、彼等を聖に結べる如し。
この夜は實にぞキリストが、

死の曳繩を切放ち、地獄に勝し者として天に昇らせ給へるにひこしかる。
そは、もし我等救はれざれば、
生れしも甲斐なく益なけれ實に生れざりしに如かさらん。
實にや神祕ことなる哉、主我等に御慈悲の御眼を垂れ給ふは。
實にや妙にして美しき事なる哉、嗚呼はかりがたき甘味なる愛よ。
そは奴隷を救はんまでぞ、御獨子をば渡し給ひければなり。
嗚呼キリストの御死去によりて、
取り消されたる罪は等しく罪なれど、
かくまで強き希望に置かれたる罪なりとは、實に實に妙へなる理りなりや。
嗚呼幸福なる過失よ、そは之を救はんが爲めに、
かくも限りなき威力にて在す救主の天降り給ひしを見たらばなり。
嗚呼實に幸なる夜よ、この夜のみぞ、

キリスト死者の中より復活り給へし時刻をば知り得たり。

この夜は記録されしごこ、晝の如くにぞ輝けり。

我を圍める夜は光りとなりぬ。

この聖き夜は、兇惡を逃し、罪を洗ひ、

落入りし者に無罪を、悲しめる者には歡喜をば返すなり。

この夜は憎惡を逃し、心に親睦を造り、世の勢力をも服はしむるなり。

(祝別されたる五粒の香を御復活ローソクに十字架形に挿入す)

さらば、この聖寵ゆたけき夜に於て、聖なる聖父よ、

願はくはこの薫香の、夕の供物を嘉納して受け入れ給はん事を。

最も聖なる主の聖會は、蜂の働きにつくられし、

此ローソクのいと壯嚴き舉式によりて、

聖職者の手もて御主に返し奉つる。

されど我等は、もはや、神の光榮の爲に

照り輝ける火の灯しうつされし蠟燭の

其の響をば既知れり。

(補祭は三本の枝形なるローソクの本を以つて、その一本より御復活の蠟燭に火を移す)

この火は部分に分けたれども、分かれし光は不足を知らず、

そは、火は、この美しき灯の油こそすべく、母なる蜂の作りし

溶解たる蠟にて育まれたればなり。

(聖堂のランプを灯す)

嗚呼眞に幸なる夜よ、

そは、エジプト人を奪ひ、ヘブレテ人を富ましめられたればなり。

この夜に天上なる物は地上の物も、天主のものは、人のものも結ばれり。

主よ、願はくは聖名の光榮の爲めに、
祝別せられたる蠟燭以て、この夜の暗黒を逃さんがため
我等を保たせ給はん事を。

又薫しき香となりて、地上の光に交ぜしめ給はん事を、
東雲の光さす者よ、この焔を見出し給へ。

ほのほの光さし給ふ者よ、
汝は夜の帷幕の下りるのも知り給はず。

御身は死者の中より出で給ひて、
暗なる人類の上に輝きをば放ち給へり。
されば主よ、

願はくは、主の僕なる我等にも又總ての聖職者と、主を最と愛する民にも、
我等の聖なる教皇(御名)も、我等の司教(御名)にも、

等しく平和なる時代を與へ給へよ。

この過越の歡喜に於いて主のたえざる御保護により、我等に王たり給へかし、
而して我等を治め保たせ給はん事を。

主よ聖靈ご偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名により
て願ひ奉つる、▲『アーメン。』

十二豫言の朗讀

第一の豫言 (創世記第一章一―卅一第二章一―二)

解説

聖會は今日の受洗者の教訓と洗禮の意義を示すため、以下舊約の十二ヶ所の豫言を讀む。
世界の創造は、キリストに由る超自然的靈界の再生を象り、開闢の時主の聖靈、水の

面を覆ひ給ひしが如く、キリストの御定めによりて、水と聖靈は人を超自然的に再生せしむるこの意なり。

元始に天主天と地とを創らせ給へり。然れど地は形状なく且つ曠漠しくて暗黒深淵の上にある、又天主の靈水の面を覆へり。

天主宣へり、光あれよ、而して光ありき。天主光を善と覽給ひ、光を闇より別ちて光を晝、暗を夜と稱ばせ給へり。夕と朝ありて是れ第一日なり。天主又宣へり、水の中央に蒼穹出で、水と水を別てよと。天主乃ち蒼穹を作り、蒼穹の下の水と、上の水を別ち給へば即ち然成れり。

天主又宣へり。天の下の水は一區に匯り、乾ける處現はれよと。即ち然成れり。天主乾けるを陸地と稱び、水の匯れるを海洋と名け給へり。天主之を善と覽給へり。天主又宣へり。地は種子を作す青草と、各其の類によりて實を結び、自から核子を有てる果樹を生ぜよと。即ち然成れり。地は種子を作す青草と、其の類によりて實を結び

自ら核子を有てる果樹を生ぜり。天主之を善と覽給へり。夕と朝ありて是第三日なり。天主又宣へり。天の蒼穹に光体ありて晝と夜とを別ち、又、天象と季節と日と歳との爲となり、天の蒼穹に輝きて地を照せよと。即ち然成れり。天主二つの巨大なる光体を作り大なる光体をして晝を宰らしめ、小なる光体をして夜を司らしめ、且つ星辰を作り給へり。

天主此等を天の蒼穹に据ゑて地を照らさしめ、光と闇とを別ち給へり。天主之を善と覽給へり。夕と朝とありて是第四日なり。天主又宣へり。水は影き生物を生じ天の蒼穹の下、地の面に飛翔類を生ぜよ。即ち天主巨大なる魚介と、水に澤に生じて動く總ての生物を其の類に従ひ、又總ての禽類を其の類に従ひて創造し給へり。天主之を善と覽給へり。天主斯く宣ひて之を祝し給へり。産めよ、殖ゑよ、海に盈てよ、禽類は地に殖ゑよと。夕と朝ありて是第五日なり。天主又宣へり。地は生物を其の類に由りて、又家畜、爬虫類、及び地の畜類を其の類に由りて生ずべしと。即ち然成れ

り。天主地の畜類を各其の類に従ひて造り、又家畜地地の總ての爬虫類を其の類に従ひて作り給へり。天主之を善く覽給へり。

天主斯くて宣へり。我儕、我儕の像に由り、我儕に似せて人を造り、之に海洋の魚介空の禽類家畜全地地に動く爬虫類を悉く治めしめんと。天主己に象りて人を創造し、之を男と女とに創造し給へり。天主彼等を祝して宣へり。産めよ、殖ゑよ、地に満てよ、地を征服せよ、海洋の魚介、空の禽類、地上に動く總ての生物を治めよ。天主又宣へり。看よ、我地上に種子を生ずる總ての草蔬と、自ら其の類の核子を有てる總ての果樹を汝等に任せり。蓋は汝等の糧となり、且つ地の總ての畜類、空の總ての禽類、地に動きて生ける總てのものの食物ならん爲なり。即ち然成れり。天主之等の總て爲し給へる物を覽給ひしに、極めて善かりき。夕と朝ありて是第六日なり。斯くて諸天と地と其の總ての群衆は成れり。天主其の造りし工を七日に畢へ、第七日の日に安息し給ひて之の日を祝し、之を聖くなし給へり。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

妙なる御攝理によりて人を創り給ひ、又更に妙なる御攝理によりて人を救ひ給ひし天主よ、願はくは我等を永遠の歡喜に入れしめん爲め、諸々の罪の惡愆に對し銳智の御恵を以て心を堅固にならしめ給はん事を、主聖靈に倍に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる。▲「アーメン」

第二の豫言

(創世記第五、六、七、八章の中より)

天主が洪水を以つて其正義を現はし給ひしに、洗禮の水を以つてはその慈悲を現し給ふを示す。兩者によりて罪惡滅び、方舟に象られたる聖會は、新約のノエの一族とも云ふべき、洗禮によりて新に生れる者を見て救ひ、天の山即ち天國に導くこの意なり。

ノエ五百歳におよびて、セム、カム、ヤフエトを設けたり。人地上に殖ゑはじめて女子生まるゝにいたりし時、天主の子等は人の子等の女子の麗しきを眺め、彼等の中よ

りおのく、撰むところを取りて己が妻をなせり。天主かくて宣へり。わが靈は永く人の中に住まらざるべし、蓋は彼は肉なればなり、彼の日は百二十年なるべしと。其頃、地に巨人等住めり。其後天主の子等人の子等の女子等に近きしかば、女子等産をなせり。之より古に響ありし力強き輩いでたりき。

天主人の惡の地上に蔓り、且つ彼等の心の思念のすべて常に惡に傾くを覽給へり。天主遂に人を地上につくりしを悔み、之を心に深く憂ひて宣へり。我つくりし人を地の面より殲滅しめん、人より畜類まで、又爬虫類より空の禽類にいたるまで凡て絶やさん、蓋は我之等をつくりしことを悔ゆればなりと。然れどノエは天主の御前に恩寵を見出せり。ノエの傳は之なり。ノエ義人にして其の時代の人々の中に於て完き者なりき、ノエ天主と偕に歩めり。斯くて彼は三人の子セム、カム、ヤフエトを産めり。然るに、世は腐敗し、且つ不義に満ちたりき。偕て天主世の腐敗せるを覽給ひしかば（蓋は總て肉人世にありて其の道紊れたればなり）天主ノエに宣へり。總て

の人の終末は來れり、彼等によりて不義世に滿ちしがゆゑに、我彼等を世と共に絶やしめん、汝削りたる木片をもて方舟を造り、方舟に房々を設け、且つ舟の内外に瀝青を塗るべし、汝之を作るにかく爲すべし。即ち方舟の長さ三百肘、廣さ五十肘、高さ三十肘となすべし、又方舟に採光窓を作り之を一肘として上方に設くべし、戸口は一方に設け、方舟を下部に二階に三階とに分つべし。而して看よ、我地上に洪水をまねきて、凡そ天の下に生命の氣息ある總ての肉を滅ぼさしめん。斯くて地上のもの悉く絶ゆべし。然れど、我汝とわが契約を立てん、汝は汝及び汝の子供等又汝の妻と汝の子供等の妻とは汝と共に方舟に入るべし。又肉なる總ての畜類を汝と共に生かさんが爲に、牡牝二つを方舟に入らしむべし、禽類は其の類に従ひ、四足獸はまた其の類に従ひ、總ての地に匍ふ生物はまた其の類に従ひ、各二つを汝と共に入れて、その生命を保たしむべし。故に汝總ての食物をも採り、之を方舟に携ひ入るべし。是れ即ち汝と是等のものの食物ならん爲なり。而してノエ天主が彼に命ぜし事を悉く然爲せ

り。洪水地に漲りしときノエは六百歳なりき。

大淵の源 悉く壞れ、天の扉開けて四十日四十夜地に雨りたり。此の日ノエ共其の子セム、カム、ヤフエト及びノエの妻と其の子供の三人の妻は共に方舟に入れり斯くて彼等と總て其の類に從へる畜類、其の類に從へる總ての家畜、其の類に從へる地に動く總ての生物、其の類に從へる翔類、總ての鳥類、從て空に飛ぶ生物は、ノエ共方舟に入れり。然れ共方舟は高く水上に浮遊べり。而して地上に夥しく増まりて總ての高き山々天の下に覆はれたり。水其の山々より十五肘の上に騰れり。然れば凡そ地に動く肉、禽類、家畜、野獸、總て地に匍ふ生物 悉く死せり。唯ノエと彼と共に方舟に在りし者のみ残り。而して水百五十日の間地を覆ひたり。

天主ノエ及び彼共方舟に在りし總ての野獸、總ての家畜を憶ひ給ひて、地に風を起し給ひしかば、水減じたりき。又大淵の源と天の扉は閉ざされ、天より雨降り歇みき。斯くて水地上に往來して退き、百五十日の後次第に減じはじめたり。又

四十日經ちし時、ノエ其の方舟に設けし窓をひらき鳥を放ちたりしが、水地に渴けるまで還らざりき。ノエ又鳩を放ちて水地の面より去りしかを見んとしたりき。然れ共水尚ほ全地にありしかば鳩其の足を止むべき處を知らず、彼の許に歸りて再び方舟に入れり。彼即ち其の手を延べて之を捕へ方舟中に放てり。而して尙七日を待ちて、更に鳩を方舟より放ちたり。然れ共、鳩日暮に嘴に若葉のある橄欖の枝をくはへて返りきたれり。之に依りてノエ水の地より退きしを知れり。彼尙ほ七日を待ちて鳩を放ちたりしが、再び彼の許に還らざりき。時に天主ノエに宣ひけるに、汝及び汝の妻と汝の子等汝の子等の妻共方舟を出すべし、汝共在りし總ての生物總て肉なるもの、即ち鳥類及び家畜、又總て地を匍ふ生物を汝と共に出して地の面に入らしめよ而して産めよ、殖ふよ。然ればノエ彼共其の子等と妻と、其の子等の妻共に出でたり。

ノエ天主に祭壇を築き、總て潔き獸と總て潔き鳥とを捕へて祭壇に燔祭として献け

たり、天主其の馨しき香を嗅ぎ給へり。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

不變の勢力、永遠の光に在し給ふ天主、願はくは御慈悲を以て主の妙なる聖會を願み、且つ御攝理によりて主の聖會が何日にも其の聖旨を果さんが爲、主の聖會をして靜に人類の救靈に盡さしめ給はん事を。斯くて廢れしは擧げられ、倒れしは興され總ては其の痕跡を止めずして、その根源なる天主に歸服るべきものなるを覺らしめ給はん事を、主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる、▲「アーメン」

第三の豫言

(創世記第廿二章一―十九)

アブラハムに依るイザークの犠牲は、十字架上の犠牲の象徴にして又アブラハムの正義と從順と犠牲心とは受洗者の模範なりとの意なり。

其の時天主アブラハムを試みて彼にアブラハム、アブラハム、ご宣へり。彼答へて我此處に在りと云へり。天主又彼に、汝の愛する獨子イザークを携へて我が示現の地に往き、彼處にて我が汝に示さんとする山に於て彼を燔祭して獻ぐべし。茲於てアブラハム拂曉に起き出で、其の驢馬を用意し、二人の若者と其の子イザークを伴ひ、且つ燔祭の薪を伐りて、天主の彼に示し給へる處におもむきしが、三日日にアブラハム眼をあけて遙の處を見たりき。而してアブラハム其の若者に云ひへり。汝等は驢馬と共に此處にて待て、我我子は彼處に急ぎゆきて禮拜をなし、後復汝等に還り來らんと。アブラハム即ち燔祭の薪を取りて其子イザークに負はせ、己は手に火と刃を乗りたり。

彼等二人にて往きけるととき、イザーク其の父に對ひて父よご、云へり。彼之に答へて、子よ何を欲するやご云へり。イザーク即ち父に云へり。火と薪とはあり、然れご燔祭の羔は何處にありやご。アブラハム答へて、子よ、天主自ち燔祭の生贄を備へ給

はんこ。斯て彼等二人共にすゝみ往きて天主の示し給へる處に到れり。アブラハム其處に一つの祭壇をきづき、薪を其上におきて其子イザクを縛して薪の堆積のうへに据ゑり。而してアブラハム手を延べて刃を執り其子を屠らんせり。時に看よ、主の天使天より叫びて云へり、アブラハム、アブラハム。彼之に答へて、我此處に在り云へり。天使云ひけるは、汝の手を子に按る勿れ、又彼に何をも爲すべからず、我今汝が天主を畏るゝを知れり、蓋は汝の獨子をも我が爲に惜まざればなり。アブラハム眼をあけて己が背後に一疋の牡綿羊の其の角を荆叢にからまれつゝあるを見たり。アブラハム即ち其牡綿羊を捕へ、之を其の子の代りに燔祭として献けり。而してアブラハム其處を、天主覽給ふ、三名附けり。是より今に尙人々此處を天主山の上に覽給ふこ、云ひ傳へり。天主の天使再び天よりアブラハムに呼びて云へり。我己れに對ひて誓はん。汝此の事を爲し、我が爲に汝の獨子を惜まざりしに由りて、我大いに汝を祝し、又汝の子孫を増し、天の星の如く、濱の眞砂子の如からしむべし。汝の子孫は

其の敵の門を占めん。又天下の民は總て汝の子孫に於て祝福せられん。蓋は汝我が聲に服へたればなり。斯くてアブラハム其の僕等の處に歸りて皆偕にベルサベーに到れり、アブラハムは其處に仕めり。

祈願せん

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

最高く在ます信者の父なる天主よ、主は世界何處においても其の約束の子等に家督を嗣ぐべき聖寵を注ぎ給ひて、彼等を増し給ひ、且主の僕たるアブラハムに契ひ給ひし如く、過越の妙理によりて總ての民の先祖となし給ふにより、願はくは主の民を主の子たるの聖寵に浴さしめ給はん事を、主と聖靈と共に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの御名によりて願ひ奉つる、▲「アーメン」

第四の豫言

(出埃及記第十四章二四―卅一第十五章の一)

イスラエル人の紅海を涉りたるは洗禮の象徴にして、新約のモイゼなるキリストは、受洗者を十字架の柱を以つて導き、且つ御血によりて靈魂を其の仇なる惡魔の奴隸より救はるゝこと又洗禮の水によりて惡魔と其の軍隊なる罪を鎮め給ふことの意なり。

既に黎明となりしが、看よ、天主火と雲の柱の間よりエジプト人の陣に眼をそゞぎて、彼等の全軍を殲滅し、其の戰車の輪を覆へし給ひしかば、彼等海の底に引込まれたりき。然ればエジプト人云へり。我等イスラエルより逃れん、蓋は天主彼等の爲に我等と戦へばなりき。時に天主モイゼに宣へり。汝の手を海の上に延ばせ、然らば水はエジプト人其戰車と騎士等の上に逆巻き流れんと。モイゼ即ち手を海の上に延べしに東雲に海初めの處にかへり、海水逃ぐるエジプト人に襲ひかかり、主は彼等を瀾の最中に沈め給へり。斯くて、海水復還りてイスラエルを追ひ來りしファラオの全軍

の戰車と其の騎士等を覆ひ、之を悉く海中に埋めしかば、一人も残る者なかりき。然れどイスラエルの子等は海の乾ける處を歩みしが、水彼等の爲に右と左に分れて墻壁の如くなれり。斯くて天主此の日イスラエルをエジプト人の手より救ひ給へり。彼等海岸に死せるエジプト人を見、且つ天主が力強き手をエジプト人の上に延ばし給ひし事とを見たりき。是に於て民天主を畏れ、主と其の僕モイゼとを信じたり。

司「祈願せん」補「跪かん」副「いざ、起たん」

天主よ、主が選民をエジプト人の迫害より救はんきて右の手の勢力によりて行ひ給ひし奇蹟は、現在も洗禮の水によりて諸々の民の救靈の爲めに行ひ給へば、主の奇蹟は古の如く今尙我等の時代に於いて其の光榮を保ち給ふなり。願はくは總ての民アブラハムの裔等なる、イスラエル人に與へ給ひし御恵みを、我等にも豊に與へ給はんことを、主の聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりてねがひ奉つる。▲「アーメン。」

第五の豫言

(イザヤ書第五十四章十七、第五十五章一―十一)

イザヤ豫言者の叫びは、曠に渴ける者を救靈の水なる洗禮の水に招き、妙へなる洗禮の水を讃めたふるの意なり。

是主の僕等の領くべき嗣業なり、而して彼等が我許にて見出す正義なりと、主は宣へり。

汝等渴ける者はことごとく水にきたれ、財なき者もとく來りて購ひて食せよ。財なく交易物なくとも來りて葡萄酒と乳を購へ。何故糧にもあらぬものの爲に金を費し飽くをえざるもの爲に勞苦するや。能く心を用ひて我に聴き美物を食せ、斯くて汝の靈魂は脂づきて樂まん。汝の耳をかたぶけて、我にきたれ。聴け、然らば汝の靈魂は活くべし。我又汝等と共にミコシへの契約をなし、ダヴィドに約せしまここの哀憐を示さん。

視よ、我之を諸々の民の證となし、又諸々の民の首となし、司配者となせり。看よ汝は知らざる一つの國民を招かん、又汝を知らざるおほく他國民は汝の許に走りきたらん。蓋は汝の天主なる主、イスラエルの聖者によりて天主汝に光榮あらしめ給へたればなり。汝等主に遇ひうる間に主を尋ねよ。主近く居給ふ間に主を呼び求めよ。惡しき者はその途を捨て、邪なる者はその思念を捨て天主に還れ。然らば主彼をあはれみ給はん。我等の天主はゆたかに赦し給へば、いざ還りきたれ。主は宣へり。我が思は汝等の思にあらず、我が道は汝等の道にあらず。我が道の汝等の道よりも高く、我が思の汝等の思ひよりも高きは、恰も天の地より高きがごとし。雨と雪と天より降りて又還らずして地を沾し、之に浸入りて芽生しめ、播く者には種を、食ふ者に糧を與ふるが如く、我口よりいづる言葉もこれに等し。我言葉は空しく我にかへらずして、我が欲むところを成し、我が其の爲に之を遣はしし事を悉く果さんと、全能の主は宣へり。

司『我等祈らん』 補『跪かん』 副『いざ起たん』
 全能永遠の天主、願はくは古の聖人の未來に豫言の成就すべき事を信じたりしが如く、聖會をして其成就を覺らせ給はん爲め、又主の聖名の光榮のため祖先の信仰に約し給ひし事を與へ、且つ聖なる家督として御契約を子等に増し給はん事を。主と聖靈とに偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる、▲『アーメン』

第六の豫言 (バルク書第三章九―廿八)

天主の智識の讚美、天主の限りなき智識はキリストにおいて地上に現はれ、人の中に住み給へることを示し、天主の智識より離れたる者は悪魔の奴隸となること、又洗禮によりて智識に歸る者は、力と能力と平安とを得べきことを示す。

イスラエルよ、生命の掟を聴けよ。汝耳傾けて賢智を知るべし。イスラエルよ何と

て汝は敵地に在るや、何ぞて異邦にありて歳老ひしや。

汝は死者の中に穢されり。而して汝は冥府に陥いる者の中に定まりぬ。汝は知識の泉を去れり。されど、汝もし天主の道を歩みしならば、謬なく永遠の幸福に住みしならん。賢智は何處にありや、勢力は何處にありや、智慧は何處にありやを學べ。蓋は汝之に依りて何處に長壽と糧ありや、何處に眼の光明と平安ありやを知らん爲めなればなり。

誰かその在處を見出せしや、その寶庫に入りし者は誰ぞや、國民の諸侯等又地上に棲む猛獸を治むる者は何處にありや、空の禽類と戯むる者、又金銀を集むる者は何處にありや、人々之に信頼を置きて飽かず蓄ふるなり。銀細工を爲す者は何處にありや、彼等は之に勞苦してその作るごころ限りなし。彼は墮されて冥府の中に降り、他の者起りて彼等の處を占めたり。又若者此の世の光を見て地に住みしが、彼等は眞の智識の道を知らず、其の小徑を悟らずして、彼等の子等之を受けざりしかば、道は彼等の

親より遠かれり。賢智はカナアンに聞こえず、又テマンにも見えざりき。地よりの賢智を尋ぬるハガルの子等こ、メルラとテマンの商人と、寓話の話しと、賢智こ、智慧こを詮索する輩とは叡智の道をしらず、其の小徑を叙べざるなり。嗚呼イスラエルよ、天主の家は如何に巨大なる哉。主の有てる地積は如何に廣大なる哉。主は偉にして、極みなく最高くして窮なく在し給ふ。初期に名高き巨人等ありて、丈高く戦ひに慣れし者なりしが、主は彼等を選び給はざりき。彼等は眞の智識の道をしらざる輩なり。然れば彼等は亡び失せり。彼等は叡智を有たざりしかば、その愚昧のゆゑに死ねり。誰か天に上りて叡智を獲、而して其を雲より引き來りしや、誰か海を航りて之を見出し、其を最純き黄金よりも好みて齎らせしや。其の逕を知りえし者なく、又其の小逕を尋ぬる者一人もあるなし。然れど、萬事を知り給ふ者は叡智を知り、賢智もて之を見出し給へり。彼地を永久に固め、之に總ての動物を充たさしめ給へり。又彼光を送り給へば光出で、彼光を呼び給へば、光は怖きつゝ彼に従ふ

なり。然れば諸星辰は其の位置にて光を與ひ、自ら歡べり。彼等呼はれければ斯く云ひぬ、我等此處に在り、こ。而して彼等よろこびて己を創りし者の爲に輝けり。彼は我等の天主なり、彼に較ぶべきもの一つもあるなし。彼は眞の智識の總ての道を見出し、其の僕なるヤコブこ、愛するイスラエルに與へ給へり、其の後彼地に於いて現れ入こ共に住み給へり、こ。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ、起たん」

何日にも異邦人を召して聖會を擴め給ふ天主よ、願はくは洗禮の水によりて潔められたる者を絶えざる御保護の許に守り給はん事を。主こ聖靈こ偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりてねがひ奉つる、▲「アーメン」

第七の豫言

(エゼキエル書卅七章一―十四)

野に横はりし白骨が主の靈によりて生かされたるは敵の捕虜となりたるイスラエルの民が、

天主の恵によりて歸國せること、又受洗者がキリストに由りて靈的回復を得たること、人類が終りの日に肉体を以つて復活るべきことを象る。

其の時、主の手我が上に臨み、主の靈に依りて我を外に曳きゆき野の真中に立たしめ給へり。其處には骸骨充てり。主の手此の骸骨の周圍を我を曳きめぐり給ふに、骸骨夥しく野の表にありて皆甚だ燥けり。彼我に宣ひて云へり。人の子よ、汝是等の骸骨は生くべしと思ふやと、我云へり、主なる天主よ、其は汝の知り給ふところなりと彼又我に宣へり。是等の骸骨に就きて豫言し、彼等に云へ、枯れたる骸骨よ主の言を聞けと。主なる天主是等の骸骨に宣へしは之なり、看よ、我汝等の中に靈を送らん、而して汝等は活かしめられん、又我筋を汝等の上に置き肉を汝等の上に生ぜしめ、且つ皮以て汝等を覆ひ、氣息を汝等に與へん、斯て汝等活きて我の主なることを知らんこと我主が命ぜし如く豫言しけるが、我が豫言しつゝありし時に響あり、又震動ありて骨と骨は互に其關節にて近づけり。又我見しに、看よ、筋と肉は其上を覆みて皮又

其上に展がりしが、氣息未だ其中にあらざりき。彼又我に宣へり。人の子よ、氣息に豫言せよ、汝豫言して氣息に云へ。主なる天主かく云ひ給ふこと。氣息よ汝四方の風よ來りて此の殺されし輩の上に息吹きて彼等を活さしめよ。我主が命ぜし如く豫言せしかば、氣息骸骨に入て皆活けるものとなり、且つ足にて立ち無數の群集となれり。斯くて又た彼我に宣へり。人の子よ、是等の骨は悉くイスラエルの子供なり、彼等自ら云へり我等の骨は枯れ、我等の希望は失せ、而して我等は絶やされたり。是故に豫言して彼等に云へ、主なる天主かく云ひ給ふ、我民よ看よ、我汝等の墓を曝き、汝等を其の墓より引き出してイスラエルの地に至らしめん、我が民よ、我汝等の墓を曝きて汝等を其の墓より引出す時、汝等は我の天主なるを知ん、又我靈を汝等の中におきて汝等を生しめん時、我汝等を其の地に安んぜしめん。而して汝等は汝等に語り且つ行ひしは主なる我なりしを知らん、と主なる天主は宣へり。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

我等に過越の妙理を祝はしめん爲め、兩約聖書の御言もて教へ給ふ天主よ、願はくは我等現在主の賜をうけ奉つるに依りて、未來に於ける賜の希望を堅固ならしめん爲め、主の限りなき御慈悲を悟らしめ給はん事を。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる、▲「アーメン」

第八の豫言

(イザヤ書第四章一―六)

このイザヤの豫言は當時、イエルザレムが天主の罰によつて蒙むりし戦争後の難儀甚だしく一人の男に七人の女の依靠る程なりしを示し、靈的難儀にある者が洗禮に依りキリストに於て罪の耻と不幸を取除かれ、葡萄の親樹なるキリストに於て善き實を結び、聖會に於て安らかなる生活を營むにいたらんとの意なり。

七人の女一人の男にすがりて云はん、我等おのれの糧を食ひ、己が衣を纏ふべし、唯我等に汝の名をとらふるを許して、我等の恥を取除け。其の日天主の若芽は光

榮と豊麗のうちにあらん。而して地の果實は豊に實り、又救はれしイスラエルの人々には歡喜あるべし。而して看よ、シオンに残る者又イエルザレムに止まる者、凡そイエルザレムに存ふる者の中に録されたる者は、聖と呼ばれん。蓋は主、其の時、審の靈と燼す靈をもて、シオンの女の汚れを洗ひ、イエルザレムの血をその中より洗ひ給ふべければなり。而して主はシオンの總ての山の上に又主の御名の呼ばるる所に、晝は雲と煙ををつくり、夜は焰の光をつくり給はん。蓋は凡て光榮の上に、主の庇護あるべければなり、又一つの天幕ありて晝は暑さを防ぐ陰となり、暴風と雨を避くる所となるべし。

詠 誦

(イザヤ書第五章一―二)

我至愛の者肥えたる山の項に一つの葡萄の園を設けり。彼其のめぐりに垣を廻し小石を除きてそれにソレクの葡萄を植ゑ、其の中に望樓を建て、酒搾を作れり。この

萬軍の主の葡萄の園はイスラエルの家なり。

司「祈願せん」 補「跪かん」 副「いざ起たん」

主は主の聖會の子等において、主の統治し給ふ何處にても、御身を善き種播人と、優る橄欖の耕作者ごなし給へるに依り、願はくは主の御前に葡萄の園と種圃を認め給ふ主の民の中より、缺點と汚れとの荆棘と蕪とを取除き給ひて豊なる實を結ばしめ給はんごを、主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの御名に由りて願ひ奉つる。▲「アーメン」

第九の豫言 (出埃及記第十二章一—十二)

舊約の過越の羔は眞の羔なるキリストの象にして、主の御血の功德は受洗者を永遠の死より救ひ給ふごを、又其の御肉体は人の靈的糧となり、現世の旅路に人を強むるごの意なり。其の時、主、エジプトの國においてモイゼとアロンに宣ひけるは、「此の月を汝

等の月の始となすべし。汝等是を年の正月となすべし。汝等イスラエルの全會衆に告げて云ふべし。此の月の十日に、家長たる者、各自の羔を取らべし。即ち家毎に一疋の羔を取らべし。もし家族少くして、其羔を食ひ盡す事能はずば、その家の隣なる人と共に、人の數に従ひて之を取らべし。各人食ふ所に従ひて、汝等羔を計らべし。汝等の羔は、疵なき當才の牡なるべし。汝等緬羊又は山羊の中よりこれを取らべし。而して此の月の十四日迄、之を守り置き、イスラエルの會衆みな薄暮に之を屠り、其血を取りて、之を食ふ家の門口の柱と鴨居に塗り置くべし。而して此の夜其肉を火に炙きて食ひ、又酵なきパンに、苦菜をそへて食ふべし。是れを生にても又水にて煮ても食ふ勿れ。火に炙くべし。其頭と脚と臍とを皆食へ。其を明朝迄残しておく勿れ。明朝迄残れる者は火にて焼つくすべし。汝等斯して之を食ふべし。即ち腰を引きからけ、足に鞋をはき、手に杖を取りて急ぎて之を食ふべし。是主の過越なればなり。

司「祈願せん」補「跪かん」副「いざ起たん」
全能永遠の天主、主は諸々の御業に於いて妙く在し給ふに依り、願はくは主に依りて救はれし者をして、是終の日に我等の過越なるキリストの屠られ給ひし犠牲は、開闢の時世界の創造されし御業よりも、偉ひなる偉業なる事を覺らしめ給はん事を。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりてねがひ奉つる、『アーメン。』

第十の豫言

(ヨナ書第三章一十)

ニニベ市の改心と救霊の條にしてヨナは救主を象れり。救主が我等を救はんとして自らを受難の嵐の海中に渡し、三日間墓の中に留り給ひしことを示し、不信仰のニニベがヨナによつて改換したる如く、受洗者も救主キリストによりて改心の恵をうけ、洗禮によりて救はるゝとの意なり。

其の時、天主の御言再びヨナに告げられたり。曰はく、汝起ちて大いなる都ニニベに往け、其處にて我が汝に命するところを説け。ヨナ即ち天主の御言にしたがひて、起ちてニニベに往けり。偕てニニベは甚だ大なる都にして街を廻るに三日を要するほどなりき。ヨナ其の都に入り、初一日歩きて呼はり且云ひけるは、尙ほ四十日にしてニニベは滅ぶべし。さればニニベの人々神を信じ、斷食を布れ、最も大いなる者より最も小さき者に到る迄、皆荒衣を被たり。この噂ニニベの王に聞えければ、彼其の王坐を起ちて朝服を脱ぎ荒衣を身にまとひて灰の中に坐せり。又王、大臣と共命をくだして、ニニベに叫ばしめて曰く、人も畜も牛も羊ももに何をも味ふべからず。又物食ひ水飲むべからず、人も畜も荒衣をまとひ、只管天主に呼はり、且各人其の惡しき途及び其の手に作す不義より離るべし。天主其の聖旨をかへて赦し、其のはげしき怒を止めて我等を滅さじと誰か能く知るをえんと。而して天主彼等の業を覽、彼等が惡しき途より離るゝをみそなはせり。即ち我等の天主なる主は其の民を憐み給

へり。

司『祈願せん』 補『跪かん』 副『いざ起たん』

天主よ、聖名を讚美するにあたりて、異なる人々を一致せしめ給ひしにより、永遠の生命に選ばれたる民の心の信仰と、行爲の熱心とを一致せしめんが爲めに、願はくは我等に主の命じ給ひし事を爲んとする望みと協力との恵みを與へ給はん事を。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる、▲『アーメン。』

第十一の豫言

(申命記第卅一章廿二 卅)

モイゼの遺言にして聖會はこの遺言の言葉を借りて、受洗者をして天主の掟に忠實ならしめ天主の妙へなる御業に對する信仰を保たしむるや、勵すの意なり。

その時モイゼ讚歌を録して之をイスラエルの子孫に教へたり。天主はヌンの子ヨズ

エに命じて曰く、汝等心を強くして且勇ましかれ。蓋はイスラエルの子等を我が約せる地に導く者は汝にして且つ我汝と共に在ればなりと。然れば、モイゼ此の律法の御言を悉く書き記したる後、モイゼ天主の契約の櫃を昇ぐところの、レビ人に命じて云ひけるは、この律法の文をとりて汝等の神、天主の契約の櫃の傍に置き、之を汝に對する證ならしめよ。我汝の頑固にして其首の頑を知ればなり。視よ、我尙ほ生存へて汝等と共に在る間すらも汝等は頑に天主に悖れり、然れば况して我が死したる後は如何ばかりならん。汝等の種族に判士に從ひ總ての長老等を吾許に集めよ、我はこれらの言を、彼等に語りきかせ、天と地を呼びて彼等に證をなさしめん。蓋は我知る、我死したる後には、汝等必ず惡き事を行ひ、我が汝等に命ぜし道を離れん。而して後の日に災害汝等に臨まん。是汝等天主の尊前に惡を行ひ、汝等の手の業を以て、天主の怒りを招くにいたればなり。斯くてモイゼ、イスラエルの全會衆にこの歌の言を語り聞かせたり。

詠 誦

(申命記第卅二章一—四)

諸の民よ、耳をかたむけよ、我語らん地よ、我口の言を聞け。わが教は雨のごとく
我言ば露のおくが如く注がん。蒙の若艸のうへに降る如く、霧雨の青艸のうへに降
るが如し。我天主の聖名をよばん。我等の天主に汝等光榮あらしめよ。天主の御業は
完くして、其の道はみな直し。天主は眞實に在して悪しき處なく、義にして直に在し
給ふ。

司『いざ我等祈らん』 補『跪かん』 副『いざ起たん』

敬虔なる人の譽、且義人の勢力にて在す天主、主の聖なる僕モイゼの讚美歌によ
りて、この申命記を我等の案内として、主の民を教へ給ひしにより、願はくは御恵を
うけし總ての民に於いて、主の勢力を活動せ給へ。彼等をして主を畏るゝ心を和らけ
歡喜を與へ給はん事を、蓋は主は御赦しによりて、總ての罪の亡びし後、罰ししての

呪ひを救靈に代らしめ給ひたればなり。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給
ふ是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる、▲「アーメン」

第十二の豫言

(ダニエル書第三章一—廿四)

燃ゆる竈に投入られたる三人の青年が天使に救はれたる如く、受洗者は、大猷の使者なる
イエズスによりて永遠の地獄の火より救はれ、又迫害の日に於て主の慰安を受くこの意なり

其の時ナブコドノソル王一箇の黄金の像を作れり。其の高は六十肘、その身巾は六
肘なりき、乃ち之をバゼロン州のドラの野に立てり。而してナブコドノソル王は太守
奉行、總督、參議、財司、知事及び諸州の總ての有司を集めしめ、ナブコドノソル王の
立てたる其の像の建立式に臨ましめんせり。是に於いて其の太守、奉行、總督、參議
財司、知事及び諸州の總ての有司等は、ナブコドノソル王の立てたる像の建立式に臨
み、そのナブコドノソル王の立てる像の前に立てり。時に傳令者大聲に呼はりて云ふ

諸民諸族諸語よ、汝等斯く命ぜらる、汝等喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏、箏等の諸々の樂器の音をきく時には、平伏してナブコドノソル王の立てたる黄金像を拜すべし。總て平伏して拜せざる者は、即時に火の燃ゆる竈の中に投込まるべしと。是を以て諸民等喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏、箏等の諸々の樂器の音をきくや、直に諸民諸族諸官みな、平伏してナブコドノソル王の立てたる黄金像を拜せり。

其時數人のカルデヤ人等、進みいで、ユダヤ人を譏奏せり。即ち彼等ナブコドノソル王に奏して云へり。願はくば王の齡永かれ。王よ汝は命を出して宣せり、總て喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏、箏等の諸々の樂器の音を聞く者は皆平伏してこの黄金像を拜すべし、凡て平伏さざる者は皆火の燃ゆる竈の中に投込まるべしと。茲に汝が立てバビロン州の事務を司らしめるユダヤ人、シドラク、ミサク及びアブデナゴあり、王よ此の人々は汝を尊ばず、汝の神々にも仕へず、汝の立て給へる黄金像をも拜せざるなり、ミ。是に於てナブコドノソル王怒り且つ憤りてシドラク、ミサク、アブデナ

ゴを召し寄よと命じければ、即ち此の人々は王の前に引き出だされしに、ナブコドノソル彼等に問ひて云ひけるは、シドラク、ミサク、アブデナゴよ、汝等我が神に仕へず、我が立てたる黄金像を拜せざるは眞なるや、汝等もし今從はんせば喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏、箏等の諸々の樂器の音をきく時に、平伏して我がつくれる黄金像を拜すべし。然れど汝等もし拜せずば即時に火の燃ゆる竈の中に投げ込まるべし。何れの神が能く汝等をわが手より救ひ出すことあらん。

シドラク、ミサク及びアブデナゴ對へて王に行ひけるは、此の事に於いて我等は汝に對ふるに及ばず、蓋は王よ、我等の仕ふる我等の天主、我等を其の燃ゆる竈の中より引き出し汝の手の中より我等を救ひ出すを得ん、假令天主之を欲み給はずも、王よ知り給へ、我等と汝の神々に仕へず、又汝の立てたる黄金像をも拜せじ。是に於いてナブコドノソル怒に充たされ、シドラク、ミサク及びアブデナゴを眺めて其の顔の容を變へ、即ち竈を常よりも七倍熱くせよと命じ、又その軍勢の中の力強き人々を

呼びて、シドラク、ミサク及びアブデナゴを縛りてこれを火の燃ゆる竈の中に投げこめと命じたり。是を以て此の三人は、其の外衣、巻帽、履物其の他の衣服を纏ひるまゝに縛られて火の燃ゆる竈の中に投げ込まれたり。蓋は王の命は甚だ急にして且つ竈は甚しく熱するたればなり、然るに其の火焰はシドラク、ミサク及びアブデナゴを投入みたる輩を焼き殺せり。然れどシドラク、ミサク、アブデナゴの三人は縛られたるまゝにて燃ゆる竈の中に落入りしも、彼等は焰の中を歩みつゝ天主を讚美し、主を祝しつゝありき。

司「祈願せん」

唯一の希望に在す全能永遠の天主、主は豫言者等の言を以て、現在に於ける妙理を説明し給ひしにより、願はくは主の民の希望を御慈悲を以て増し給へ。蓋は主徳意め給はずば、主を信仰する者の善徳は空しければなり。主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの御名に由りて願ひ奉つる。▲「アーメン」

洗禮用聖水の祝別式

「洗禮の泉水盤」ある聖堂においてこの式あり。其時行列にて司祭及十字架と祝別された復活のローソクを持つ補祭と副補祭は「泉水盤」の傍へゆく、其間救霊の水への渴きを現す次の詩篇を歌隊が歌ふ、尙ほ此の式を略する場合直ぐ諸聖人の連禱が歌はれる。

詠 誦 (詩篇 第四十一章一―四)

嗚呼天主よ、鹿の溪川をしたひ喘ぐがごとくわが魂主を慕ひ喘ぐなり。
わが魂は渴けるものゝごとくに活神をば慕ふ、いづれの時にか我行きて天主の御前にいでん。
彼等終日我に向ひて、汝の神はいづくに在るやこのゝしる間は、たゞわが涙のみ夜晝そそぎてわが糧となりき。

「願はくは主汝等と共に在さん事を」▲「又汝の精神と共に在さんことを」

祈願 せん

全能永遠の天主、願はくは溪川の泉を従ひ喘ぐ鹿の如く主を慕ふ熱心なる民を顧み御慈悲を以つて彼等の信仰の渴望を妙なる洗禮もて霑し靈肉共に聖ならしめ給はん事を主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて願ひ奉つる。 ▲「アーメン」

「願はくは主汝等と共に在さん事を」 ▲「又汝の精神と共に在さんことを」

祈願 せん

全能永遠なる天主、願はくは主のたいなる御慈悲の玄義と秘蹟を祝ふに當りて、之を援け、この洗禮の水によりて、新に生れんとする民に、家督の聖靈を遺し給はんことを

とを。蓋は不肖なる我等が授くる事も、主の御力によりて完ふし給はん爲めなればなり。願はくは主と聖靈と偕に世々生存へ統治し給ふ、是の御子イエズス・キリストの聖名によりて。 ▲「アーメン」

「願はくは主汝等と共に在さんことを」 ▲「又汝の精神と共に在さん事を」

「心を上げて主を仰ぐべし」 ▲「我等の心主を仰ぎ奉つる」

「我等の主なる我等の天主に感謝し奉つる」 ▲「善く且つ正しき事なる哉」

實に、善く、且つ正しく益ありて又福なる哉、何處にても何時にても主に感謝し奉つるは。聖なる主、全能の父、永遠の天主、主は見えざる能力を以つて奇くも秘蹟の効果を働せ給ふ。又我等はかく偉大なる秘蹟を授くるには足らざる者なれども其の聖寵の賜を捨て給はずして、御慈悲をもて我等の祈願に耳を傾け給ふ主よ、主の聖靈は元始に水の面を覆ひたりき、此の時より既に水は物を聖からしむる力を受けたりき斯くて水は汚れし世の罪惡を洗ひ、洪水を以て再生の象徴となし給へるに等しき材料

にて、主の妙理によりて罪は終り、善は始りたりき。主よ、願はくは主の聖會を覽し、主の聖會に於いて再生のを増し給はんことを。主は溢るゝ恩恵もて主の聖都を悦ばしめ、改心せんとする全地の民には洗禮の水を開き給ふ。蓋は洗禮の水は主の御稜威高き命令によりて、聖靈に依り、御獨子の能力を受けん爲なればなり。

(司祭十字架の形に水を分ける)

これ十字架より世界の四方に主の御恵が流れし如く、又十字架の御血と聖靈によりて、水が靈魂を聖とするの能力を受くるを表はす。

願はくは主が人の再生の爲に備へたる此の水に妙なる能力を加へて豊なるものごなし給はんことを。蓋は、この祝別されし聖き泉の汚れなき胎内より、新しき被造物の生れて天の子となり、肉的に於ては性、時間に於ては年は異なるも、母なる恵によりて總て等しく童子ごならん爲なればなり。然れば主よ總ての汚れたる靈を此處より取り

除き、惡魔の偽なる諸々の罪惡を放ち給へ。斯くて此處に惡魔の力の加はるの余地なく、又其の誘引も徘徊るに由なく、秘かなる罫をも設くるを得ず、又惡疫の瘡すこごもなからん。

(司祭は其の聖權によりて手を水の上に置いて、恰もこの水を聖會の所有ごなすの意を示す)

願はくはこの聖にして汚れなき被造物の敵の攻撃より免かれ、總ての罪惡は之に依りて取除かれて聖となり、且つ生命の泉、再生の水、淨むる瀾とならん事を。蓋は總てこの救靈の水にて洗はれんごする者は、聖靈の御働きにより罪の赦しと完き潔白を受けんが爲めなればなり。

(司祭三度水の上に十字架を印す)

然れば水なる被造物よ、我は生命なる天主、眞理なる天主、至聖なる天主、即ち汝を元始に御言を以て乾ける地より分ち、其の靈を以つて汝を覆ひ給ひし天主によりて汝を祝す。

(司祭手にて水を四方に分ちて灌ぐが如くす、之れ主の御言に「全世界に往きて、信する者に洗禮を授けよ」ごあるに倣ふの意なり)

天主は汝を樂園の泉より流れ出でしめ、四つの河となして全地の四方を沾はせ給へり。主は又荒野に於ける苦き水に甘味を加へて飲料に適ふ善き水となし、渴ける民には岩より水を迸らしめ給へり。我は御獨子我等主イエズス・キリストに依りて汝を(水)祝す。

蓋は主は、汝(水)によりてガリラアのカナに於いて最妙なる奇蹟を行ひて葡萄酒となし、聖足もて汝の上へ歩み、ヨルダンの川に洗者聖ヨハネより、汝を以つて洗禮を受け給ひ、又汝を御血と共に其の御脇腹より流れいでしめ給ひ、且つ弟子等に向ひて信する者には汝を以つて洗禮を授くるやう命令して「往きて萬民に教へ、彼等に聖父と聖子と聖靈の聖名によりて洗禮を授けよ」と曰へり。全能慈悲なる天主よ、我等は主の命を守るによりて、主の聖寵によりて我等と共に在さん事を。

(司祭水の面に三回息を吹き掛く)

願はくは主の聖口を以つて、この汚れなき水を祝し給はん事を、蓋は水の肉体を潤すと共に心をも潔めん爲め、主が之れに力を與へ給はん爲めなればなり。

(司祭復活祭の蠟燭を少し水に浸す、之はヨルダン河において主が洗禮を受けて水を洗禮の用となるやう聖化せし如く、主の象なる此の復活の蠟燭を以つて洗禮の聖水を祝すこの意なり。)

願はくはこの洗禮の泉に、主の聖靈の御能力の豊かに降り給はん事を。(三回)

(司祭三回目に水に蠟燭を入れたるまゝ、十字架の如き形に二、三回息を吹き掛く、之れは十字架に磔れる主と聖靈の能力を示す意なり)

又この水の總ての本質に、再生の力あるものごなし給はん事を。

(司祭復活の蠟燭を水中より取る)

願はくはここに於いて總ての罪の汚れは消え、主に象られたる人性は、その初めの

光榮を恢復され、總下の汚れより潔められんことを。蓋は人皆悉く、此の再生の秘蹟に入りて、眞に罪なき新なる幼子に生れんが爲めなればなり。主の御獨子我等の主即ち生ける者ご死せる者ご、又此の世ごを火にて審かんが爲めに來り給ふ、我等の主イエズス・キリストに由りて。▲「アーメン」

(司祭は聖油を十字形に水に入れる)

願はくはこの聖水の聖油によりて、之(水)より生るゝ者の爲め聖別され、且つ豊なるものとならしめ給はんことを。▲「アーメン」

(司祭は又右の如くに聖香油を入れる)

我等の主イエズス・キリストの聖香油ご、又慰め主なる聖靈ごは聖なる三位一体の御名に由りて注がれん事を。▲「アーメン」

(司祭聖油ご聖香油ごを十字架形に入れる)

この聖別の聖香油ご、塗抹の聖油ご、又洗禮の聖水ごは、聖父ご聖子ご聖靈の御名

によりて混和せられん事を。▲「アーメン」

(司祭は聖香油、聖油、洗禮用聖水を交ぜる)

受洗者ある場合は此處にて洗禮聖式を行ふ。古は次の諸聖人の連禱を其間に歌へり、今は洗禮式のなき場合にも之れを歌ひながら司祭、補祭、副補祭は祭壇の前の階段の處に平伏し其間、連禱の終り頃に行はれる復活前日の歡びのミサのために祭壇の飾付をする。

諸聖人の連禱

(此の連禱は一一繰返し歌はる)

主憐み給へ

基督憐み給へ

主憐み給へ

基督我等に聴き給へ

基督我等の祈りを聞き入れ給へ

天主たる聖父

我等を憐み給へ

世の贖主たり天主たる御子

同

天主たる聖霊

同

一天主なる聖三位

同

聖マリア

我等の爲めに祈り給へ

天主の聖母

同

童貞の中にて最も聖なる童貞

同

聖ミカエル

同

聖カプリエル

同

聖ラファエル

同

聖なる諸々の天使及び大天使

同

聖なる各階級の福霊

同

洗者聖ヨハネ

同

聖ヨゼフ

同

聖なる諸々の太祖及び豫言者

同

聖ペトロ

同

聖パウロ

同

聖アンドレア

同

聖ヨハネ

同

聖なる諸々の使徒及び福音史家

同

主の聖なる諸々の弟子

同

聖ステファノ

同

聖ロレンシオ

同

聖ヴンセンシオ

同

聖土曜日 諸聖人の連禱

聖なる諸々の殉教者

聖シルベストロ

聖グレゴリオ

聖アウグスチノ

聖なる諸々の司教及び證聖者

聖なる諸々の博士

聖アントニオ

聖ベネチクト

聖ドミニコ

聖フランシスコ

聖なる諸々の司祭及び侍祭

聖なる諸々の修士及び山修士

我等の爲に祈り給へ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

聖マリア、マグダレナ

聖アグネス

聖セシリア

聖アガタ

聖アナスタジア

聖なる諸々の童貞及び婦婦

天主の諸々の聖人及び聖女

哀憐を垂れて

同

總ての惡より

總ての罪より

終りなき死より

同

同

同

同

同

同

我等の爲めに傳達をなし給へ

主我等を赦し給へ

主我等の祈りを聞き入れ給へ

主我等を救ひ給へ

同

同